

# 概況

[歌舞伎]

## 2023年の歌舞伎界・増える新作上演

小玉祥子

コロナ禍も一応の終息を見て2023年の歌舞伎興行は、おおむね平常通りに行われた。ここ数年の傾向ではあるが、ことに今年は新作上演が目立った。また、歌舞伎座では2部制と3部制が併用され、若手の起用が積極的に行われた。国立劇場が老朽化による建て替えのため、10月末で閉場となったのも大きな出来事であり、かつ2度の入札が不調に終わり、2024年1月時点で着工及び再開場の見通しが立っていないのが不安材料だ。

歌舞伎座は通年で「歌舞伎座開場十周年」と銘打たれた。1月が「壽初春大歌舞伎」。3部制で、1部は舞踊の「卯春歌舞伎草紙」と「弁天娘女男白浪」の「浜松屋見世先」「稲瀬川勢揃い」。愛之助の弁天小僧、勘九郎の南郷、芝翫の駄右衛門、猿之助の忠信、七之助の赤星の配役が清新であった。

2部の序幕は曾我物の新作「壽恵方曾我」（松岡亮脚本）で白鸚の工藤、幸四郎の五郎、染五郎の犬坊丸で高麗屋三代が顔をそろえた。続いて「人間万事金世中」。「強欲勢左衛門始末」の副題が付き、前年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の北条時政役が評判を得た彌十郎を勢左衛門に起用。

3部は「十六夜清心」の「白蓮妾宅」まで入れた通し。幸四郎の清心、七之助の十六夜、梅玉の白蓮。

2月が「二月大歌舞伎」で3部制。1部は「三人吉三白浪」で「大川端」「吉祥院」「火の見櫓」。松緑の和尚、愛之助のお坊、七之助のお嬢の顔合わせ。

2部は序幕が「女車引」で魁春の千代、七之助の八重、雀右衛門の春という3世代の女形が持ち味を發揮。続いて五世富十郎十三回忌追善の「船弁慶」。父の当たり役である静御前、平知盛の靈の2役に長男の鷹之資が挑んで成果を上げた。

3部は「靈験龜山鉾」の通しで、仁左衛門が「一世一代」で冷酷さと不気味さが魅力的な武家の水右衛門と町人の小悪党の八郎兵衛の2役を勤めた。

3月が「三月大歌舞伎」で3部制。1部が新作歌舞伎「花の御所始末」（宇野信夫作・演出、齋藤雅文演出）の通し。1983年以来の上演で室町幕府六代将軍の足利義教が破滅するまでを描く。幸四郎の義教、芝翫の畠山満家。

2部の序幕が「仮名手本忠臣蔵 十段目天川屋義平内」。単独の上演は久々で、芝翫の義平、孝太郎のおその、幸四郎の由良之助。続いて「身替座禪」。松緑の右京、鴈治郎の玉の井。

3部は序幕が新作歌舞伎「鬪腰尼」（吉井勇作、玉三郎演出、今井豊茂補綴）。玉三郎の鬪腰尼、中村福之助の鐘楼守七兵衛。続いて「廓文章」。愛之助の伊左衛門、玉三郎の夕霧。

4月が「鳳凰祭四月大歌舞伎」。2部制で、昼は新作歌舞伎「新・陰陽師 滝夜叉姫」（夢枕獏原作、石川耕土監修、猿之助脚本・演出）の通し。平将門の乱の後日談。2013年に同じ題材で初演されているが、改めて稿を起こし、古典歌舞伎の技法を用いた変化に富んだ面白い作品に仕上がった。隼人が安倍晴明、染五郎が源博雅、巳之助が将門、中村福之助が依藤太、児太郎が桔梗の前、尾上右近が興世王、壱太郎が滝夜叉姫、猿之助が蘆屋道満の配役で花形世代が主要な役をしっかりと勤めた。

夜の序幕が「与話情浮名横櫓」の「見染」「赤間別荘」「源氏店」。仁左衛門の与三郎、玉三郎のお富が息の合った芝居を見せた。市蔵の蝙蝠安、権十郎の和泉屋多左衛門。続いて「連獅子」。松緑の親獅子、左近の仔獅子。夜の部は5日から7日まで公演が中止された。多左衛門に予定され、休演中の左團次が15日に82歳で世を去った。

5月が「團菊祭五月大歌舞伎」。2部制。昼の序幕が「寿曾我対面」。梅玉の工藤、魁春の大磯の虎、松也の五郎、尾上右近の十郎で、幹部と花形の共演。続いて「若き日の信長」（大佛次郎作）。團十郎の信長、児太郎の弥生。最後が「音菊眞秀若武者」（今井豊茂作、菊五郎演出）。菊五郎の孫で寺島しのぶの長男尾上眞秀の初舞台。

夜の序幕が「宮島のだんまり」。中幕が舞踊「達陀」(萩原雪夫作、二世藤間勘齋振付)。松緑の集慶。戦後舞踊の傑作が代替わりして受け継がれた。

最後が「髪結新三」。菊之助の新三、児太郎のお熊、彦三郎の弥太五郎源七。

この公演中に起きたのが明治座5月公演出演中の猿之助の事件で、18日に段四郎が76歳で亡くなった。荒事や敵役などに優れた舞台ぶりの大きな立役であった。

6月が「六月大歌舞伎」。2部制。昼の最初が「傾城反魂香」(石川耕土監修、猿翁補綴・演出)。「土佐将監閑居」の後に舞踊仕立ての「浮世又平住家」を付けた。初代猿翁型に基づく演出。中車の又平、老太郎のおとく。続いて「児雷也」。最後が舞踊「扇獅子」。

夜は「義経千本桜」で「木の実」「小金吾討死」「すし屋」「川連法眼館」。仁左衛門の権太、松緑の佐藤忠信と忠信実は源九郎狐。

7月が「七月大歌舞伎」。2部制。昼が「菊宴月白浪」(四世鶴屋南北作、奈河彰輔脚本、猿翁脚本・演出、石川耕土脚本・演出、藤間勘十郎演出)の通し。二世猿翁が復活し、「三代猿之助四十八撰」に数えられる。中車の斧定九郎後に暁星五郎、歌之助の与五郎、猿弥の仏権兵衛。

夜の序幕が「神霊矢口渡」。児太郎のお舟、男女蔵の頓兵衛が初役で挑んだ。中幕が「め組の喧嘩」。團十郎の辰五郎。最後が舞踊「鎌倉八幡宮静の法楽舞」(松岡亮作)。團十郎が静御前、老女などの七変化。河東節、常磐津、清元、竹本、長唄の掛け合い。

8月が「八月納涼歌舞伎」。3部制。2部の「団子売」のみが古典演目という興行。1部の最初が「次郎長外伝 裸道中」(谷屋充作、大場正昭演出)。獅童の勝五郎、七之助のみき、弥十郎の次郎長、高麗蔵のお蝶。続いて舞踊「大江山酒呑童子」(萩原雪夫作)。勘九郎の酒呑童子。

2部の最初が「新門辰五郎」(真山青果作、織田紘二演出)。幸四郎の辰五郎、勘九郎の会津の小鉄と、歌六の勇五郎。続いて「団子売」。巳之助の杵造、児太郎のお福。

3部は「新・水滸伝」(横内謙介作・演出、杉原邦生演出、猿翁スーパーバイザー)。「三代猿之助四十八撰の内」。単人の林沖、中車の晁蓋。

9月が「秀山祭九月大歌舞伎」。「二世中村吉

右衛門三回忌追善」で吉右衛門ゆかりの演目が並んだ。昼の序幕が「金閣寺」。歌六の大膳で、雪姫は米吉と児太郎のダブルキャスト。勘九郎の東吉、菊之助の直信。続いて「土蜘蛛」。幸四郎の智籌実土蜘蛛の精、又五郎の頼光。最後が「二條城の清正 淀川御座船」。白鸚の清正、染五郎の秀頼。

夜の序幕が「車引」。又五郎の松王丸、歌昇の梅王丸、種之助の桜丸、歌六の時平。播磨屋一門が主要な役を固めた。中幕が「連獅子」。菊之助の親獅子、丑之助の仔獅子。最後が「一本刀土俵入」。幸四郎の茂兵衛、雀右衛門のお鳶。20日から23日まで幸四郎が休演し、「土蜘蛛」は菊之助、茂兵衛は勘九郎が代わった。

この月の13日に猿翁が83歳で世を去った。古典演目の復活、スーパー歌舞伎などの新作の創造、門閥外の俳優の抜擢などを成し遂げ、歌舞伎に一時代を画した。自身が創作、復活した作品を集めて制定したのが「三代猿之助四十八撰」である。

10月は「錦秋十月大歌舞伎」。2部制。昼の最初が「天竺徳兵衛韓嘶」。序幕に「北野天神境内」「同別当所」を付け、「吉岡宗観邸」「同裏手水門」を大詰に置いた。松緑の徳兵衛、又五郎の宗観、高麗蔵の夕浪。徳兵衛の異国話に工夫が感じられた。続いて「文七元結物語」圓朝の落語を元にした新作。山田洋次脚本・演出、松岡亮脚本。お久(玉太郎)が吉原の角海老前に立つ場面から始まる。獅童の長兵衛、寺島しのぶのお兼、新悟の文七。

夜の最初が「角力場」。獅童の長五郎、巳之助の与五郎と長吉。中幕が舞踊「菊」。最後が「水戸黄門」(宮川一郎作、齋藤藤文補綴・演出)。弥十郎の水戸光圀、中村福之助の佐々木助三郎、歌之助の渥美格之進。

11月は「吉例顔見世大歌舞伎」。2部制。昼は「極付印度伝マハーバーラタ戦記」(青木豪脚本、宮城聰演出)の通し。2017年10月に歌舞伎座で上演された作品の再演。菊之助が演じる太陽神の子、迦楼奈を軸に展開される。単人の阿龍樹雷、芝のぶの鶴妖楽、坂東亀蔵の百合守良、米吉の汲手姫。抜擢を受けた芝のぶの好演が印象的であった。

夜の最初が「松浦の太鼓」。仁左衛門の松浦鎮信、歌六の其角、松緑の大高源吾。中幕が「鎌倉

三代記 絹川村閑居」。梅枝の時姫、時蔵の三浦之助、芝翫の高綱。最後が舞踊三題で「春調娘七種」は種之助の五郎、左近の静御前、染五郎の十郎。「三社祭」は巳之助の悪玉、尾上右近の善玉。「教草吉原雀」は又五郎の鳥売りの男実は雀の精、孝太郎の鳥売りの女実は雀の精。

12月は「十二月大歌舞伎」。3部制。1部の最初が「旅噂岡崎猫」(奈河彰輔脚本、石川耕土補綴・演出、猿翁演出)。「獨道中五十三驛」から「岡崎無量寺」を独立させた。巳之助のおさん実は猫の怪、新悟のお袖、橋之助の民部之助。続いて歌舞伎座には初登場の最新映像技術を駆使した超歌舞伎「今昔響宴千本桜」(松岡亮脚本、藤間勘十郎演出・振付)。獅童の白狐の尊後に佐藤四郎兵衛忠信とバーチャルシンガーの初音ミクが共演。

2部の最初が舞踊「爪王」(戸川幸夫脚本、平岩弓枝脚色)。勘九郎の狐、七之助の鷹。続いて初演の新作歌舞伎「俵屋玄蕃」(竹柴潤一脚本、西森英行演出)。「荒川十太夫」に続く松緑の企画による講談を素材にした新作。松緑の玄蕃、坂東亀蔵の杉野十平次。

3部の最初が舞踊「狸々」。松緑、勘九郎の狸々、種之助の酒売り。続いて「天守物語」(泉鏡花作、玉三郎演出)。七之助の富姫、玉三郎の亀姫、虎之介の姫川図書之助、勘九郎の舌長姥と桃六。

国立劇場は通年で「初代国立劇場さよなら公演」として興行が催された。

1月は「遠山桜天保日記」(竹柴其水作、菊五郎監修、国立劇場文芸研究会補綴)。菊五郎の遠山金四郎、松緑の生田角太夫、菊之助の尾花屋小三郎、彦三郎の佐島天学。2008年に同劇場で約半世紀ぶりに上演された演目の再演。

3月は「一條大蔵譚・五條橋」。「鬼一法眼三略巻」から「一条大蔵譚」の「曲舞」「奥殿」と「五條橋」。久々の「曲舞」の上演が特色。又五郎の大蔵卿、魁春の常盤御前、歌昇の鬼次郎、種之助のお京。「五條橋」は歌昇の弁慶と種之助の牛若丸。

6月は「歌舞伎鑑賞教室」で「日本振袖始一八岐大蛇と素戔鳴尊一」。扇雀の岩長姫実は八岐大蛇、鶴松の稲田姫、虎之介の素戔鳴尊。

7月は「歌舞伎鑑賞教室」で「双蝶々曲輪日記一引窓一」。芝翫の南与兵衛、錦之助の濡髪長五郎、高麗蔵のお早、梅花のお幸。

9月は「妹背山婦女庭訓」〈第一部〉。9、10月の2か月に分けての上演で、1部は「春日野小松原」「太宰館花渡し」「吉野川」。時蔵の定高、松緑の大判事、梅枝の雛鳥、萬太郎の久我之助、坂東亀蔵の入鹿。時蔵、松緑は初役。

10月は「妹背山婦女庭訓」〈第二部〉。「布留の社頭」「三笠山御殿」「三笠山奥殿」「同入鹿誅伐」。歌六の入鹿、芝翫の鱧七実は金輪五郎、菊之助のお三輪、梅枝の求女、米吉の橘姫、時蔵のおむらと藤原鎌足。初代国立劇場最後の公演。

8月11～15日は第29回稚魚の会・歌舞伎会合同公演。「廓三番叟」連獅子。

新橋演舞場の1月は「SANEMORI」。「源平布引滝」を素材に石川耕土の脚本で源平の戦いの木曾義賢、義仲親子の姿に斎藤実盛をからめた。團十郎の実盛、Snow Manの宮舘涼太の義仲、義賢。右團次の瀬尾十郎、中原兼任、児太郎の小まん、巴御前。

7月は新作歌舞伎「刀剣乱舞 月刀剣縁桐」(松岡亮脚本、尾上菊之丞演出、松也演出)。同名の人気ゲームの初歌舞伎化。刀をモチーフにした刀剣男士が活躍する。舞台を室町幕府足利義輝が討たれた「永祿の変」に取った。松也、尾上右近、鷹之資、苔玉、吉太朗、河合雪之丞、梅玉ら。

12月は新作歌舞伎「流白浪燦星」(戸部和久脚本・演出)。モンキー・パンチ原作の漫画「ルパン三世」の翻案。舞台を安土桃山時代に設定し、卑弥呼の金印をめぐり、流白浪燦星(愛之助)、次元大介(笑三郎)、石川五右衛門(松也)、峰不二子(笑也)らが活躍。弥十郎の真柴久吉、中車の銭形警部、猿弥の唐句屋銀座衛門。

浅草公会堂の1月は「新春浅草歌舞伎」。1部が「引窓」男女道成寺。2部が「傾城反魂香」連獅子。

南座の3月は「花形歌舞伎」。「仮名手本忠臣蔵」の「五段目」「六段目」と舞踊「忠臣いろは絵姿」。A、Bに別れ、Aプロは壱太郎の勘平、千之助のおかる、尾上右近のお才、鷹之資の定九郎、苔玉の千崎、吉之丞の郷右衛門。Bプロは尾上右近の勘平、苔玉のおかる、壱太郎のお才、吉之丞の不破と定九郎、鷹之資の千崎。

5月は「歌舞伎鑑賞教室」で「妹背山婦女庭訓」の「願絲縁芋環」。吉太朗のお三輪、りき彌の橘姫、千次郎の求女。

7月は「坂東玉三郎夏のひとつき」。落語「一豊と千代」小朝、地唄「由縁の月」玉三郎。

8月は「坂東玉三郎特別公演」の「怪談牡丹燈籠」(円朝原作、大西信行脚本、玉三郎演出、今井豊茂演出・補綴)。玉三郎のお峰、愛之助の伴藏、喜多村緑郎の新三郎、河合雪之丞のお国、吉弥のお米。

9月は「新・水滸伝」。

12月は「吉例顔見世興行」で「十三代目市川團十郎白猿襲名披露」。2部制。昼の最初が「角力場」。鴈治郎の濡髪、単人の放駒、染五郎の与五郎。次が「外郎売」。新之助の外郎売実は曾我五郎、梅玉の工藤、扇雀の大磯の虎、孝太郎の化粧坂少将。続いて舞踊「男伊達花廊」。團十郎の五郎藏、ぼたんの禿。最後が「景清」。團十郎の景清、雀右衛門の阿古屋、梅玉の秩父庄司重忠。

夜の最初が「仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋」。仁左衛門の由良之助、芝翫の平右衛門、孝太郎のおかる。次が「口上」。最後が「助六由縁江戸桜」團十郎の助六、壺太郎、児太郎のダブルキャストの揚巻と白玉、男女蔵の意休、扇雀の白酒売新兵衛、門之助の満江、芝翫のくわんぺら門兵衛。

大阪松竹座の1月は坂東玉三郎×鼓童初春特別公演「幽玄」(玉三郎演出・振付、花柳壽輔演出・振付)。

7月は「七月大歌舞伎」。2部制。昼の最初が「吉例寿曾我」。弥十郎の工藤、千之助の十郎、染五郎の五郎。中幕が「京鹿子娘道成寺」。菊之助の花子。最後が「沼津」。鴈治郎の平作、扇雀の十兵衛、孝太郎のお米。

夜の最初が「俊寛」。仁左衛門の俊寛。続いて「吉原狐」(村上元三作、齋藤雅文補綴・演出)。幸四郎の三五郎、米吉のおきち。

明治座の4月は「壽祝桜四月大歌舞伎」。2部制。昼の最初が「義経千本桜 鳥居前」。愛之助の佐藤忠信実は源九郎狐、歌昇の弁慶、千之助の静御前。続いて「大杯觴酒戦強者」。芝翫の足軽原才助実は馬場三郎兵衛、梅玉の井伊直孝、幸四郎の内藤紀伊守。最後が「お祭り」。梅玉、苔玉、男寅。

夜の最初が「絵本合法衢」(四世鶴屋南北作、鈴木英一補綴)の通し。幸四郎の左枝大学之助と立場の太平次、孝太郎のうんざりお松と皐月、又五郎の高橋弥十郎後に合法、芝翫の高橋瀬左衛門。

5月は「市川猿之助奮闘歌舞伎公演」。2部制。昼が「不死鳥よ波濤を越えて—平家物語異聞—」(植田紳爾作、藤間勘十郎演出・振付、猿之助演出)。猿之助の平知盛、壺太郎の白拍子若狭と紫蘭、鴈治郎の平通盛、米吉の衛紹王、単人の楊乾竜。平家滅亡後、知盛が命を救われ、海を渡り、ローランに落ち延びていたというストーリー。

猿之助の事件で18、19日は公演を中止。20日から配役を変更し、知盛は團子が代わった。

夜が「御蟲貞繫馬」(四世鶴屋南北作、奈河彰輔脚本、猿翁脚本・演出、石川耕士補綴・演出、猿之助演出)の通しで最後に舞踊「蜘蛛の絲宿直斬」。「三代猿之助四十八撰の内」。猿之助の相馬良門、猿之助は舞踊では六変化を見せた。米吉の桔梗の前、単人の台屋の四郎次、源頼光、團子のお百。18日から猿之助の役は単人が代わった。

御園座の4月は「陽春花形歌舞伎」。2部制。昼が「お染の七役」の通し。七之助の七役、喜多村緑郎の鬼門の喜兵衛、勘九郎の山家屋清兵衛、船頭長吉。

夜が「怪談乳房榎」の通し。勘九郎の菱川重信、下男正助、うわばみ三次。七之助のお関、喜多村緑郎の磯貝浪江。

10月は「片岡仁左衛門 坂東玉三郎錦秋特別公演」。最初が「東海道四谷怪談」。「伊右衛門浪宅」「伊藤喜兵衛内」「元の浪宅」。仁左衛門の伊右衛門、玉三郎のお岩。続いて「神田祭」。仁左衛門の鷹頭、玉三郎の芸者。

博多座は2月が「新・三国志」。6月は「六月博多座大歌舞伎」。2部制。昼の最初が舞踊「廓三番叟」。続いて「人情噺文七元結」。菊之助の長兵衛、雀右衛門のお兼、萬太郎の文七。最後が「太刀盗人」。鴈治郎のすっぱの九郎兵衛、愛之助の万兵衛、亀鶴の目代丁字左衛門。

夜の最初が「夏祭浪花鑑」。愛之助の団七九郎兵衛、菊之助の一寸徳兵衛、雀右衛門のお辰、梅枝のお梶、鴈治郎の三婦、橋三郎の義平次。続いて「羽根の禿 うかれ坊主」菊之助の禿、願人坊主。最後が「三人吉三」。梅枝のお嬢吉三、萬太郎のお坊吉三、彦三郎の和尚吉三。

9月は「九月博多座大歌舞伎」。「十三代目市川團十郎白猿襲名披露」。昼の最初が「矢の根」。右團次の五郎、廣松の十郎。続いて「外郎売」。新之助の五郎、扇雀の大磯の虎、芝翫の小林朝

比奈、梅玉の工藤。最後が「景清」。團十郎の景清、愛之助の重忠、孝太郎の阿古屋。

夜の最初が「鞘當」。芝翫の不破、愛之助の名古屋、孝太郎の茶屋女房。次が「口上」。最後が「暫」。團十郎の鎌倉権五郎。

平成中村座は5月が「姫路城公演」。1部の最初が「播州皿屋敷」。橋之助の浅山鉄山、虎之介のお菊、片岡亀蔵の岩淵忠太。次が「鯛賣戀曳網」。勘九郎の鯛賣猿源氏、七之助の傾城螢火、扇雀の海老名なあみだぶつ。

2部の最初が「棒しばり」。勘九郎の次郎冠者、橋之助の太郎冠者、扇雀の曾根松兵衛。続いて「天守物語」。七之助の富姫、虎之介の凶書之助、鶴松の亀姫、勘九郎の舌長姥、桃六、橋之助の朱の盤坊。

同・11月は「小倉城公演」。昼の最初が「義経千本桜」の「渡海屋 大物浦」。勘九郎の渡海屋銀平実是新中納言知盛、七之助の女房お柳実は典侍の局、新悟の義経。続いて「風流小倉俄廓彩」。

夜は「小笠原騒動」の通し。勘九郎の犬神兵部、七之助のお大の方、橋之助の岡田良助、小笠原遠江守、中村福之助の小平次、歌之助の奴菊平、小笠原隼人、片岡亀蔵の小笠原豊前守。

9月は第十三回「永楽館歌舞伎」が出石永楽館で催された。昼夜同一狂言。最初が「車引」。愛之助の梅王丸、蒼玉の桜丸、九團次の松王丸、男女蔵の時守。「口上」に続いて「釣女」。愛之助の太郎冠者、男寅の大名、蒼玉の上臈、男女蔵の醜女。

10月は「立川立飛歌舞伎特別公演」が立川ステージガーデンで催された。「三代猿之助四十八撰の内 義経千本桜忠信篇」。「鳥居前」は鷹之資の忠信実は源九郎狐、笑三郎の義経、笑也の静御前。「道行初音旅」は團子の忠信実は源九郎狐、壱太郎の静御前、猿弥の逸見藤太。「川連法眼館」は青虎の忠信と忠信実は源九郎狐、壱太郎の静御前、笑三郎の義経、中車の横川寛範実は能登守教経。

3月は新作歌舞伎「ファイナルファンタジーX」(八津弘幸脚本、金谷かほり演出、菊之助企画・演出)を豊洲のIHIステージアラウンド東京で公演。ゲームを原作に前・後編の2部構成。菊之助のティエダ、米吉のユウナ、松也のシーモア。

全国公立文化施設協会主催の巡業は東コー

スが6、7月。「菊畑」は松緑の鬼一法眼、梅枝の虎蔵、智恵内はAプロが坂東亀蔵、Bプロが萬太郎。「土蜘蛛」は松緑の智壽実は土蜘蛛の精、梅枝の頼光、新悟の胡蝶。

同じく巡業の西コースは8、9月。「土屋主税」は鷹治郎の主税、亀鶴の大高源吾、橘三郎の其角、吉太朗のお園。「汐汲」は吉弥の菊藻、亀鶴の此兵衛。

10月は中村屋一門の「錦秋特別公演2023」を全国で開催。「女伊達」「桑名浦乙姫浦島」を勘九郎、七之助、鶴松らが上演。

4月は幕張メッセの「ニコニコ超会議2023」で超歌舞伎「御伽草紙戀姿絵」が獅童、初音ミクらにより上演。

自主公演では中村橋之助、福之助、歌之助の三兄弟による「神谷町小歌舞伎」が6、7月に浅草公会堂で催された。「弁天娘女男白浪」は歌之助の弁天小僧、福之助の南郷、橋之助の駄右衛門。「高坏」は橋之助の次郎冠者、橋吾の高足壳。

8月は「第八回あべの歌舞伎 晴の会」が大坂・近鉄アート館であり、「肥後駒下駄」を上演。

10月は鷹之資の自主公演「第八回翔之會」が浅草公会堂で催された。「矢の根」は鷹之資の五郎、児太郎の十郎。「二人腕久」は鷹之資の腕屋久兵衛、渡邊愛子の松山太夫。

8月は尾上右近の「第七回 研の會」が浅草公会堂で催された。「夏祭浪花鑑」は右近の団七九郎兵衛、お辰、巳之助の一寸徳兵衛、義平次、種之助の磯之丞、米吉のお梶、鷹治郎の三婦、蒼玉の琴浦。「京鹿子娘道成寺」は右近の白拍子花子。

9月には国立劇場で「第39回俳優祭」があり、「菅原伝授手習鑑」の「加茂堤」「車引」、「戯場八景名残集」が上演された。

前進座は5月に国立劇場で公演を行った。最初が「魚屋宗五郎」で「奥庭弁天堂」「芝片門前魚屋内」。國太郎のおはま以外は全員が初役で矢之輔の宗五郎。続いて「風薫年町賑」で国立劇場と平河天満宮を背景に出演者が「かつぼれ」を披露。

こだま・しょうこ

演劇評論・ライター。著書に「芝翫芸模様」(集英社)、「二代目 聞き書き中村吉右衛門」(朝日文庫)、「完本 中村吉右衛門」(朝日新聞出版)、「艶やかに 尾上菊五郎聞き書き」(毎日新聞出版)など。

## [商業演劇]

## 2023年の商業演劇

水落 潔

ロシアとウクライナの戦争が膠着状態で推移する中、10月にパレスチナ自治区ガザ地区のイスラム組織ハマスが突然イスラエルを攻撃、大勢の死傷者を出し百数十人を人質として拉致する事件が勃発した。イスラエルはただちに反撃し軍隊をガザ地区に侵攻させ年末までに2万人を越す死者が出た。世界中が二つの戦争に振り回され、展望の見えぬ状態で年を越した。3年を越したコロナ禍もようやく収束に向かい、政府は5月に感染症1類から通常の5類に指定しやっと日常が戻ってきた。外国人観光客も次第に増加した。春頃から政治家も巡る不祥事が続発し岸田内閣の支持率は低下し、年末には安倍派、二階派の政治資金パーティの一部が議員側にキックバックされていたことが明らかになり政治不信が一気に加速した。食料品を中心に物価の値上がりもあり、先行きに不安を抱いたまま1年が暮れた。

芸能界にも様々な嵐が吹き荒れた。3月にイギリスのBBC放送が故ジャーニー喜多川氏の所属少年タレントに対する長年に亘る性加害を報道したことをきっかけに、日本でもその検証が始まった。氏はジャーニーズ事務所を創設し多くの人気タレントを育て、テレビ界をはじめ芸能界に君臨してきた人物で、近年はテレビ界はもとより演劇界でもジャーニーズ頼みの公演が増え続けてきた。それだけに影響は大きくその対応が注目された。テレビ各局はこれまでの事務所との関係を検証する番組を報道すると共に所属タレントの起用を取りやめることを発表した。9月にジャーニーズ事務所の藤島ジュリー景子社長は記者会見で事実を認めて謝罪して退任し、ジャーニーズ事務所を閉鎖、それに代わってSmil=upという新会社を創設し被害者への補償業務をすると発表した。タレント業務については新たに設立したSTARTO ENTERTAINMENTという会社が行うことになったが、その余波は今も続いている。

5月に明治座公演中の市川猿之助が自宅で父

母と共に自殺を図るという事件が起こった。猿之助自身は一命をとりとめたが父段四郎と母は死亡し、猿之助は自殺幫助罪に問われ執行猶予付きの有罪判決が確定した。週刊誌に自身のパワハラとスキャンダルが書かれることを恥じて親子心中を図ったようだ。

三つ目は宝塚歌劇団を巡る事件である。9月末に宙組の娘役が自殺し、遺族が上級生によるパワハラと長時間に亘る労働が原因であると歌劇団を訴えた。劇団側は外部有識者で構成した第三者委員会を設けて調査した結果、そんな事実は確認出来なかったと報告したが遺族は納得せず、歌劇団の内部からも事実と違うという指摘があった。事件の責任を取って歌劇団の木場健之理事長と宝塚音楽学校の角和夫理事長が相次いで辞任した。長時間労働については西宮労基局が調査に入り歌劇団は改めて実態を調査することになった。そんな事態が続く中、新トップを披露する筈の宙組公演はわずか2日公演ただけで宝塚、東京公演とも中止になり、歌劇団は2024年から公演回数の短縮など労働条件の改善を図ることを発表した。

三つの事件は内容は違うものの、それぞれの組織風土に根差した事件という点では共通していた。そこをどう改善するのが改めて問われることになった。

商業演劇の世界では3年に亘るコロナ騒動が一段落し、5月からコロナ感染症が5類に引き下げられた。つまり観客制限やマスク着用が強制されなくなったのだ。その結果劇場内での飲食や会話も緩和され観客数も次第に増えつつある。とは言え出演者やスタッフにコロナ感染者が出て公演が中止になるケースが依然として続発した。

新橋演舞場は1月が團十郎一座の歌舞伎「SA NEMORI」。2月前半は垣谷美雨原作、マギー脚色・演出「老後の資金がありません」で渡辺えりと室井滋が主演した。21年に初演した舞台を一部キャストを変えての再演。家計に無頓着な

夫を支えて働きながらコツコツと小金を貯めてきた篤子と、その親友で夫と共に小さなパン屋を営んできたサツキが主人公。ところが娘の派手婚、姑への仕送り、舅の葬儀、夫の失業と予期せぬ事態が次々に起こり老後の資金があつという間に無くなってしまふ。そんな姿をコミカルに描いた舞台で、羽塚裕一、宇梶剛士、長谷川稀世らが共演した。月末はOSKの「春の踊り」。3月はミュージカル「ルーザーヴィル」。4月は恒例の「滝沢歌舞伎」だが、今回で終了するため「FAINAL」と銘打った公演になった。5月は「少年忍者」。6月はシリーズ第9弾の「熱海五郎一座」で、吉高寿男作、三宅裕司構成・演出「幕末ドラゴン」を上演したが、前半はコロナ禍で休演した。三宅のほか渡辺正行、ラサール石井、小倉久寛、春風亭昇太らお馴染みのメンバーに、ゲストとして檀れいと「ももいろクローバーZ」の玉井詩織が加わった。高齢者劇団「シルバーガイズ」は芝居嫌いの娘が経営者になったため存亡の危機に立つ。解散公演になるかも知れぬ幕末を舞台にしたミュージカルを稽古していたところタイムスリップし全員が幕末の京都にいつてしまう。そこで出会ったのが坂本龍馬や新選組。さて全員の運命は…というコメディ。7月は新作歌舞伎「刀剣乱舞」。8月がブロードウェイミュージカル「ビートルジュース」。9月は有吉佐和子作、齋藤雅文演出「ふるあめりかに袖はぬらさじ」を上演した。作者が1972年に杉村春子と文学座のために書いた作品で幕末の横浜の遊郭を舞台に、身をはかなんで自殺した遊女が、攘夷論の高まりと共に愛国の烈女に仕立て上げられる。その騒ぎに翻弄される廓芸者お園が主人公で杉村の当たり役になった。さらに噂が一人歩きしていく情報社会の恐ろしさを先取りした作品の面白さもあって玉三郎や新派でも上演し大劇場のレパートリーになった。そのお園を大竹しのぶが初演し藪宏太、美村里江、風間杜夫、山口馬木也らが共演した。作の良さもあり水準を越す舞台になった。10月は恒例のミュージカル「少年たち」。11月はミュージカル「シェルブールの雨傘」。12月は人気コミックを脚色した新作歌舞伎「流白浪燦星(ルパン三世)」を上演した。

松竹はほかに3月にサンシャイン劇場でミュージカル「歌うシャイロック」を、6月に三

越劇場で新派公演として有吉佐和子原作、小幡欣治脚本、齋藤雅文演出「三婆」を上演した。これも様々なスタッフ、キャストで上演を重ねてきた名作で、本妻を波乃久里子、義妹を渡辺えり、妾を水谷八重子、番頭を田口守が演じた。

帝劇は2月以外は年間ミュージカル路線を貫いた。ミュージカルのラインナップは1月が「ジャニーズ・ワールド・ネクスト ステージ」、3月は「スパイ×ファミリー」4、5月が恒例の「エンドレス・ショック」、6月は改装工事で休館、6月後半から7、8月が「ムーラン・ルージュ」、9月が「ドリームボーイズ」、10月が「チャーリーとチョコレート工場」、11月が「ルパン」12月は「ABC座スター劇場」だった。

2月は「キングダム」で原泰久が雑誌に連載したコミックを藤沢文翁が脚色、山田和也が演出した舞台。春秋時代の中国を舞台に戦争孤児の信と漂が天下の大將軍になることを夢見て生きる波乱万丈の冒険物語。今回は原作の前半部分の劇化で、信を三浦宏規と高野洸、漂を小関裕太と牧島輝がダブルキャストで演じ山口祐一郎、小西遼生らが共演しスケールの大きな舞台に仕上がった。また昨年3月に初演した「千と千尋の神隠し」を24年にロンドンで上演することを発表した。

シアタークリエはミュージカルが主流だったが、昨年同様にストレートブレイの公演が増えた。1月がミュージカル「ファースト・デート」。2月はシリーズ20回を記念した「クラブ・セブン」、3月はミュージカル「レント」4月はニール・サイモン作、原田諒潤色の「おかしな二人」で20年の舞台の再演。初演と同じく大地真央、花總まりの主演で青木さやか、宮地雅子らが共演し面白い舞台に仕上がった。5月はミュージカル「シー・ラブズ・ミー」6月もミュージカル「ダーウィン・ヤング 悪の起源」、7月は原案・演出ウォーリー木下、脚本登米裕一、「ふぉ～ゆ～」が主演する「ショーボーイ」の再演。豪華客船で上演するショーの開幕直前に起こったトラブルを描いたコメディで、構成、演出がさらに練り上げられ上質の舞台になった。7月後半から8月前半は田淵久美子脚本、山田和也演出の「家族もどき」。大学教授の家で展開する喜劇で山口祐一郎の教授、大塚千弘の娘、保坂知寿の妻、浦井健治の青年と



いう配役だった。8月から9月前半は塚坂友作、山田和也演出の「シャイン・ショー」。オフィスビルで働く会社員たちによる年一回の会社対抗のど自慢大会の舞台裏を描いたシチュエーション・コメディで、朝夏まなと、小越勇輝、花乃まりあ、中川晃教らが出演した。10月はミュージカル「のだめカンタービレ」、11月はニール・サイモン作、小山ゆうな演出「ピロクシー・ブルース」で濱田龍臣、宮崎秋人、松田凌、鳥越裕貴らが出演した。12月は藤沢文翁原作、脚本、演出「プレミアム音楽朗読劇—スプーンの盾」で石井正則、山寺宏一、井上和彦、山路和弘らが出演した。

東宝はほかに1月に日生劇場で「ザ・ビューティフル・ゲーム」、3月に国際フォーラムで「ジキル&ハイド」、5月に日生劇場で「ザ・ミュージック・マン」、よこすか芸術劇場で「ラ・マンチャの男」、9月に日生劇場で「ラグタイム」、12月に「ベートーヴェン」を上演した。いずれもミュージカルである。

系列のTOHOマーケティングが9月にシアター1010で林真理子原作、西荻弓絵脚本、高橋正徳演出「最高のオパハン 中島ハルコ〜ナイルの涙」を大地真央主演で上演した。21年にフジテレビ系列で放送したドラマの舞台版で美のスーパースターのドクターハルコが豪華客船で旅行中に船内で起こった事件を解決するドラマ。田山涼成、浅田美代子らが共演した。

明治座は創業150年を迎え3月からその記念公演を行った。昨年同様にテレビ局や大手プロダクションとの提携公演が多かった。1月は創作ミュージカル「チェーザレ」で惣領冬美の人気コミックを荻田浩一が脚色、島健が作曲、小山ゆうなが演出した。15世紀にイタリア半島統一を目指した英雄チェーザレ・ボルジアの波乱に富んだ人生を描いた作品で中川晃教が主演した。2月は日本テレビ製作の「巖流島」で、関ヶ原の戦いで落武者になった宮本武蔵と佐々木小次郎がどんな人生を歩み、何故巖流島で戦わねばならなかったかを描いたマキノノゾミ脚本、堤幸彦演出の舞台。横浜流星が武蔵、中村隼人が小次郎を演じた。月末は「福田こうへいのコンサート」。3月は「大逆転!大江戸桜管賑」で細川徹脚本、演出の舞台。負けず嫌いの殿様と裏長屋の傘職人が大喧嘩。意地の張り合いの末

に互いに入れ替わって暮らすことになり、そこから起こる騒動を綴ったコメディ。松平健とコロケが主演し久本雅美、檀れいらが共演した。4、5月は歌舞伎だったが、5月半ばに先述した猿之助の事件が起こった。6月は「水谷千重子50周年記念公演」で芝居とショーの二本立て。6月末から7月は「梅沢富美男・研ナオコ特別公演」で三山ひろしが特別出演した。一部は「ナオコ婆ちゃん」より「清水次郎長旅日記」で、あこぎな借金取りに苦しんでいる老婆一家を旅をしていた次郎長が助けるという人情喜劇。梅沢の借金取り、研の老婆、三山の次郎長という配役。7月末から8月は黒澤明監督の同名の映画から横内謙介が上演台本を書き演出した「隠し砦の三悪人」。荒武者と姫と百姓が決死の覚悟で敵陣を突破する冒険活劇で上川隆也、風間俊介、六角精児、小林由依、宇梶剛士らが出演した。8月後半は「ポルノグラフィティ」の新藤晴一がプロデュースした新作ミュージカル「ヴァグランド」。10月はカンテレ開局65周年記念公演の音楽劇「浅草キッド」。ビートたけしの青春自伝から福島充則が脚本・演出、益田トッシュが音楽監督をした舞台で、大学を中退してふらふらしていた青年武が、ストリップ小屋のフランス座で深見千三郎と出会い芸人として申し上がったいく姿を描いた舞台。林遣都が武、山本耕史が深見を演じ、松下優也、今野浩貴、あめくみちこらが共演した。11月は山本周五郎作、堤泰之脚本、石丸さち子演出の「赤ひげ」。これまで様々なメディアで上演を重ねてきた作品で、江戸の小石川養生所で「赤ひげ」と呼ばれた医師新出去定と、心ならずそこで働くことになった青年医師保本登を通して真の医学とは何かを問いかけた劇で、船越英一郎が赤ひげ、猪野広樹と高橋健介がダブルキャストで保本を演じた。11月後半からは「徳光和夫の名曲につぼん」「ももくろ一座」ら、12月も「三山ひろし」「桂文枝」らいくつかの短期公演を行った。

前進座は1月前半に京都先斗町歌舞練場で山本周五郎作、津上忠脚色、市川正補綴・演出「雨あがる」を上演、1月後半から3月にかけて「棒しばり」「文七元結」の班と「かんがえるカエルくん」の班が全国巡演した。5月の国立劇場公演は河竹黙阿弥作「魚屋宗五郎」を矢之輔が初役で演じ、全員総出演の「風薫隼町舞(舞踊かっぱ

れ)」で劇場との別れを告げた。7月から9月にかけては「朗読劇」と山本周五郎原作「ひとごころし」を各地で巡演した後、国立文楽劇場で宮部みゆき原作、佃典彦脚本、松本祐子演出「あかんべえ」を上演した。江戸・深川の料理屋の娘おりんは高熱を出し死線をさまよったことで、店に居ついている五人の幽霊が見えるようになる。そこから起こる不思議な事件を綴ったSF時代劇で山本春美が主演した。10月には名古屋、立川、武蔵野と巡演し三越劇場で上演した。11、12月は親鸞聖人生誕850年記念公演として渡辺善則作、河原崎國太郎・川名あき演出「花こぶし」を全国で公演した。妻の恵信尼の目を通した親鸞の一代記で、浜名実貴が恵信尼、芳三郎が親鸞を演じた。

東京ではほかに名作ミステリーを舞台化しているノサカラボが5月に三越劇場で「ホロー荘の殺人」を、8月にサンシャイン劇場で「神津恭介呪縛の家」を上演した。どちらも野坂実演出・構成で、「ホロー荘」は風稀かなめ、紅ゆずる、林翔たら、「呪縛の家」は林一敬、濱田龍臣、手島麗央らが出演した。劇団☆新感線が3月にBrillia HALLで、シェイクスピアの「オセロ」を青木豪が戦前の関西ヤクザ社会に置き換えて脚色した「ミナト町純情オセロ」を上演した。いのうえひでのり演出で三宅健、松井玲奈が客演、高田聖子、粟根まことら劇団員が共演した。KAATが2月に黒澤明の同名の映画をもとに齋藤雅文が脚本、赤堀雅秋が演出した「蜘蛛巣城」を上演、早乙女太一、倉科カナ、長塚圭史らが出演した。2月にホリプロが日生劇場で市村正親のワンマンショー「市村座」を上演した。昨年開幕した赤坂ACTシアターの「舞台 ハリーポッターと呪いの子」はロングランを続けた。

御園座は東京や大阪の舞台の引っ越し公演が多かった。1月が「前川清・藤山直美公演」で「恋の法善寺横丁」と「オンステージ」。後半に彩の国シェイクスピア・シリーズの「ジョン王」を上演した。2月は「宝塚雪組」、3月は「細川たかし&吉本新喜劇ミュージカル「ドリームガールズ」」。4月は「花形歌舞伎」で月末に演舞場から引っ越した「ルーザーヴィル」、5月は「ミュージックマン」と「純烈公演」のほか「北島三郎」「吉本の漫才サミット」、6月は「エリザベス・アーデン」「シー・ラブズ・ミー」、「松平健 辰巳ゆ

うと 桂木団治」公演、7月は「鶴瓶」、「よしもと若手公演」など。8月は「ピーターパン」「千と千尋の神隠し」など。9月は大地真央主演「最高のオバハン 中島ハルコ」「舟木一夫公演」。10月は歌舞伎ほか、11月は「梅沢富美男・水森かおり公演」ほか、12月は「ルパン」などで年末年始にかけ「西遊記」を上演した。

松竹座は開場100周年を迎え年間を記念公演とした。1月が「玉三郎と鼓童の特別公演」、2月はSKDレビュー「春の踊り」。3月は「東西ジャニーズJr」、4月前半は「ルーザーヴィル」、後半は村野守美作、錦織一清演出「根根の魔女」だった。松竹新喜劇は渋谷天外が代表を退き、藤山扇治郎、曾我廼家一蝶ら若手五人を中心にした新体制で活動することを発表、5月に新体制での第一回公演「花ざくろ」と「三味線に惚れたはなし」を上演した。後半は「少年忍者」。6月は横内謙介作、中屋敷法仁演出のSFファンタジー「夜曲 ノクターン」で、五関晃一、戸塚祥太らが出演した。7月は恒例の「大歌舞伎」、8月はジャニーズのミュージカル、9月は演舞場から引っ越した「ビートルジュース」、10月は「星の王子さま」「お月さまへようこそ」などを素材に玉三郎が翻案、作詞、演出したファンタジー「星降る夜に出掛けよう」で、高木雄也、中山優馬、高地優吾らが出演した。11月は「キャメロット」。12月は演舞場から引っ越した「シェンブルの雨傘」の後、わかぎふ作、G2演出「わが街 道頓堀 OSAKA1970」を上演した。25年の大阪万博を当て込んだ企画で、前回の大阪万博を控えた1970年の道頓堀を舞台に将来に夢を持つ三人の若い男女の姿を描いた人情劇。浜中文一、室龍太が出演した。

新歌舞伎座は今年も歌手のコンサートが中心だったが、東京で上演した話題作を上演するケースも増えている。1月は「コロケ公演」ほか。2月は「坂本冬美公演」ほか。3月は荒川弘のコミックが原作の「鋼の錬金術師」や「舟木一夫」「純烈」のコンサート。4月は「三山ひろし公演」ほか。5月は歌手の短期公演の後、藤山直美主演の「泣いたらあかん」で、人気女優から新歌舞伎座の社長になった松尾波濤江の自伝「女役者」をもとにした人情喜劇。99年に初演した舞台の改訂版で、榎木孝明、南野陽子らが共演した。6月は「三山ひろし」「山内恵介」のコンサ

トなど。7月は「パラサイト」「ダ・ポンテ」など。8月は東京で初演した「NODA MAP 兎・波を走る」「隠し砦の三悪人」、9月はこまつ座の「闇に咲く花」、「ヴァクラント」「スクール・オブ・ロック」。10月「最高のオバハン 中島ハルコ」「浅草キッド」など。11月は「梅沢富美男・水森かおり」、12月は「赤ひげ」、「ジョン&ジェン」や歌手の短期公演だった。

南座は1月前半が松竹新喜劇で「裏町の友情」、「流れ星ひとつ」を上演、後半は「老後の資金がありません」で新橋演舞場でも上演した。2月は「歌うシャイロック」、3月は「花形歌舞伎」。4月は五木寛之原作、森脇京子脚本、齋藤雅文演出の「若き日の親鸞」。藤山扇治郎が善信後の親鸞を演じ、はいだしょうこ、藤川矢之輔、三林京子らが共演した。5月は「舞台体験ツアー」「舟木一夫」のコンサート、6月は玉三郎の脚本、演出の「星降る夜に出掛けよう」で10月に松竹座でも上演した。7月は「舞台体験ツアー」、「玉三郎コンサート」など。8月は玉三郎・愛之助らで歌舞伎「牡丹灯籠」、9月は花形歌舞伎で「新・水滸伝」。10月は錦秋喜劇特別公演で藤山直美に歌舞伎から扇治郎、扇雀が加わり「祇園小唄」「大阪ざらい物語」という新喜劇の財産演目を上演した。11月は「レビュー・イン・キョート」と題したOSKレビュー。12月は恒例の「顔見世」で團十郎襲名披露の公演だった。

博多座は1月が「天使にラブソングを」と「エリザベート」、2月が猿之助一座で「三国志」、3月が「市村座」「巖流島」、4月が「キングダム」、5月が「スパイ×ファミリー」、6月が「歌舞伎」、7月が新歌舞伎座から引っ越した「泣いたらあかん」、8月は「水谷千重子」、9月は團十郎襲名の「歌舞伎」、10月は「宝塚星組」、大地真央主演の「最高のオバハン 中島ハルコ」、11月は日本テレビ開局70周年記念の「西遊記」。マキノノゾミ脚本、堤幸彦演出、愛之助の孫悟空、小池徹平の三蔵法師、戸次重幸の猪八戒、加藤和樹の沙悟浄という配役での娯楽活劇。12月は例年通りに市民に貸し出した。

今年も多くの演劇人が亡くなった。小説家で劇作家の平岩弓枝(91歳、6月9日)、劇作家の岡部耕大(78歳、8月25日)、劇作・演出家の池田一臣(91歳、8月5日)、脚本家の山田太一(89歳、11月29日)俳優の奈良岡朋子(93歳、3月23

日)、丸山博一(88歳、9月29日)、財津一郎(89歳、10月14日)、犬塚弘(94歳、10月27日)、歌舞伎俳優の市川左團次(82歳、4月15日)、市川段四郎(76歳、5月18日)、市川猿翁(83歳、9月13日)、演出家の中村喙夫(91歳、5月28日)、栗山昌良(97歳、6月23日)、演劇評論家の高橋豊(78歳、4月8日)、演劇学者の今村忠純(80歳、4月9日)、人形作家の辻村寿三郎(89歳、2月5日)の各氏である。謹んでご冥福を祈りたい。

#### みずおち・きよし

1936年大阪府生まれ。古典演劇評論家。桜美林大学名誉教授。早稲田大学文学部演劇科卒業。毎日新聞社会学芸部を経て編集委員。1991年『上方歌舞伎』で芸術選奨新人賞受賞。

[現代演劇]

## 2023年の現代演劇 ―現代演劇が抱える不安要因

林 尚之

コロナ禍は2023年の演劇界にも大きな傷跡を残した。5類に移行し、観客はコロナ禍前の8、9割に戻ってきたものの、今後の不安も残った。不安の最大要因はようやく戻ってきた観客の年齢層を見ると、中高年層が多い一方、若い観客が少ないことだ。新劇系の劇団の公演を見に行くと、客席は高齢者の比率が高いことはコロナ禍前からの現象だが、それがより顕著になっただけでなく、バルコ劇場やシアターコクーンなど、これまで若い層の支持が厚かった劇場でも10代、20代の若い観客の比率が低下している。

そんな現状に、若い人を劇場に呼び込もうと、様々な動きが始まっている。民藝では後援会有志の寄付をもとに、登録した25歳以下の若い無料観劇してもらった「ルーキーシート」を設け、約400人が登録している。バルコ劇場では一部公演で「U30」「U18」のチケットを設定し、1万3000円のチケットが、U30で6500円、U18が3000円で販売した。また、家族や友人に観劇してもらうために贈る「ギフトチケット」も登場し、お金のない学生や演劇に無縁だった人に観劇体験をしてもらった新しい試みが広がっている。

そんな中で、演劇人の覚悟を見る思いがした公演が続いた。野田秀樹作・演出によるNODA・MAP公演「兎、波を走る」は潰れかかった遊園地「遊びの園」を舞台に、脱兎(高橋一生)を追って不思議の国に迷い込んだ娘アリス(多部未華子)と娘を探す母(松たか子)の物語。野田作品ならではの多重層の物語が猛スピードで展開する中で、もう一つの物語が浮かび上がる。脱兎は北朝鮮の作業員であり、アリスは46年前に忽然と姿を消した少女であり、母は拉致された娘の帰国をひたすら願う女性だった。不条理にも引き裂かれた母娘の姿を通して、「忘れるな」という強いメッセージが伝わってきた。

イキウメの前川知大作・演出による2年ぶり

新作「人魂を届けに」は、森の奥深くに住む山鳥と呼ばれる老女(篠井英介)のもとに刑務官(安井順平)が訪れる。彼が届けに来たのは、死刑となった老女の息子の人魂だった。寓話的な世界で繰り広げられる救いと再生の物語で読売演劇大賞の最優秀作品賞を受賞した。「無駄な抵抗」では、ギリシア悲劇「オイディプス王」をベースに、電車が止まらなくなった駅前に集まる人々(松雪泰子、池谷のぶえ)を通して、運命に抗おうと自らの意志で生き始める姿を描く。

劇団チョコレートケーキの古川健は、劇団公演「ブラウン管より愛をこめて～宇宙人と異邦人」(日澤雄介演出)で、特撮ドラマの制作現場を舞台に、ドラマに込めた差別問題を巡る攻防劇。青年座に書き下ろした「同盟通信」は、戦中に情報戦の最前線に立った通信社の記者たちの葛藤を描いた。

トラッシュマスターズの中津留章仁は、名古屋入管の収容施設で亡くなったウイシュマさんの事件をモチーフにした「入管収容所」で入管行政の実態、収容者への非人道的な対応など様々な問題点を焙り出した。「チョークで描く夢」は障がい者の雇用を始めたチョーク会社を舞台に、内なる差別意識とともに障がい者との向き合い方を問う作品。

iakuの横山拓也は、岸田国土の初期の名作「葉桜」をモチーフに現代的な視点から母娘を描く「あたしは葉桜」を上演したほか、稲垣吾郎主演「多重露光」(演出眞鍋卓嗣)は様々な人々の思いが重なり合い、思わぬ人生模様が形成される物語。枝元萌主演「モモンバのくくり罌」は自給自足の生活を送る女性を通して、母と娘の価値観を巡る対話劇で、鶴屋南北戯曲賞を受賞した。

劇団た組の加藤拓也が作・演出した「綿子はもつれる」は関係が破綻した夫婦が、妻(安達祐実)と不倫相手の間に起こった出来事によって、夫婦関係を再構築していくさまを描く。シスカンパニー公演で作・演出した「いつぞやは」は、余命宣告を受けた男と、かつての劇団仲間

との物語。窪田正孝が主演予定だったが、病気で降板し、平原テツが代役を務めた。

モダンスイマーズの蓬萊竜太が、道産子男闘呼倶楽部に書き下ろして演出した「きのう下田のハーバーライト」は下田のモーターに宿泊する2人の男を巡る物語。パルコ劇場で作・演出を担当した中島裕翔主演「ひげよ、さらば」は同名の児童文学を原作に、猫たちを擬人化した愛と裏切りの物語が展開する。

ミナモザの瀬戸山美咲が、全国高校総合文化祭の演劇部門で最優秀賞を受賞した丸亀高校の作品に新たなエピソードも交えて演出した「フットボールの時間」は、大正時代にサッカーに魅せられた女学生たちの群像劇。

ケラリーノ・サンドロヴィッチは、女優緒川たまきとのユニット・ケムリ研究室第三弾「眠くなっちゃった」で、20世紀初頭のヨーロッパを思わせる終末観漂う世界で、恐ろしくも儂い人々の姿を描いた。

JACROWの中村ノブアキは、オフィスコトーネに「磁界」を書き下ろした。警察の対応をめぐって疑問の声が上がった実際の事件をモチーフにした。また、JACROW公演では、ビジネスマンの姿を描く3作品を日替わりで上演する「経済3篇」、没後30年を迎えた田中角栄元首相の半生を描いた「闇の将軍」シリーズに、角栄の母を主人公にした短編「やみのおふくろ」を加えて4部作を上演。それらの舞台成果で紀伊国屋演劇賞の団体賞を受賞した。

serial numberの詩森ろばは、新作「スローターハウス」で障がい者施設での大量殺人事件をベースに、犯人の青年(原嘉孝)と障害児を殺された母(那須佐代子)との葛藤を対話劇で描いた。名取事務所に書き下ろして作・演出した「ホテルイミグレーション」は、政治的な問題で日本にやってきた難民とどう向き合うかを問う作品。

公共劇場では「芸術監督」の交代が相次いだ。世田谷パブリックシアターでは野村萬斎から白井晃に交代し、座・高円寺は2009年の開館時から芸術監督を務めていた佐藤信に代わり、全国でも珍しい公募・審査を経て劇作家のシライケイタが選ばれた。まつもと市民芸術館は総監督の串田和美の後任として、俳優の石丸幹二、木ノ下歌舞伎の木ノ下裕一、振付家の倉田翠の3

人が「芸術監督団」として就任する。

小川絵梨子が芸術監督6年目の新国立劇場は、フルオーディション企画で同性愛者の人間模様を描くトニー・クシュナーの名作「エンジェルズ・イン・アメリカ」を上村聡史演出で、山西惇らが出演した。山田佳奈作、眞鍋卓嗣演出「楽園」は地方の島を舞台に、女性たちの会話から今抱える問題が浮かび上がる。鶴山仁演出で続けてきたシェークスピア歴史劇シリーズの岡本健一、浦井健治、中嶋朋子らチームが再結集し「尺には尺を」「終わりよければすべてよし」を交互上演した。

東京芸術劇場は、芸術監督でもある野田秀樹が始めた「演劇道場」の公演、ワークショップが続いた。「わが町」はソートン・ワイルダーの名作をベースに柴幸男が構成・演出し、2023年の東京が舞台だった。道場生たちが企画立案した「ワーク・イン・プロGRESS」公演は、野田作品の台詞をもとにした「忘郷少女」、絲山秋子の小説を再構成した「御社のチャラ男」など8つの企画がショーケース形式で披露された。木ノ下裕一の監修、杉原邦生演出・美術「勸進帳」のほか、佐藤隆太の一人芝居「エブリ・ブリリアント・シング」は上田一豪の演出に代わって再演された。

世田谷パブリックシアターは、愚かな人間と聡明な馬(成河)を対比させたトルストイ作、白井晃演出の音楽劇「ある馬の物語」のほか、タワー建設中の街を舞台にした3世代にわたる家族の物語であるフィリップ・リドリー作、白井演出「メルセデス・アイス」、野村萬斎演出のシェークスピア作「ハムレット」を野村裕基主演で上演した。

長塚圭史が芸術監督に就任して2年目の神奈川芸術劇場は、黒澤明監督の名作映画をもとにした斎藤雅文脚本、赤堀雅秋演出「蜘蛛巣城」は戦国時代の武将夫婦(早乙女貴一、倉科カナ)が謎の予言で翻弄される姿を描き、アーサー・ミラー作、長塚演出「アメリカの時計」は世界大恐慌の時代に生きた家族の物語。倉持裕作、杉原邦生演出「SHELL」は特異な人間が存在する世界の青春ファンタジーで、筒井康隆原作、福原充則上演台本・演出の「ジャズ大名」は激動の幕末に黒人たちがジャズを持ち込んで小藩の藩主(千葉雄大)を巻き込む奇想天外な作品。

座・高円寺は坂手洋二作・演出の燐光群「わが友、第五福竜丸」をはじめ、あやめ十八番「六英花 朽葉」、世田谷シルク「工場」、下鴨車窓「旅行者」など多彩な劇団公演が並んだ。

パルコ劇場は、同劇場以外にも東京芸術劇場などの貸館で多くの公演を行った。三谷幸喜作・演出「笑の大学」は検閲官(内野聖陽)と浅草の座付き作家(瀬戸康史)の攻防を描く。デヴィッド・リンゼイ・アペアー作、藤田俊太郎演出「ラビット・ホール」は子供を事故で亡くした夫婦(成河、宮沢エマ)の再生の物語。アレクシス・ミシャリク作、マキノゾミ上演台本・演出「エドモン」は名作「シラノ・ド・ベルジュラック」を生んだエドモン・ロスタン(加藤シゲアキ)を主人公にしたドタバタコメディ。太宰治の同名小説をもとにした五戸真理枝上演台本・演出「新ハムレット」はシェークスピアの名作の大胆な翻案パロディ。

シアターコクーンは、東急文化村の建て直したため2023年4月から27年度まで閉館に入った。トルストイ原作、英国のフィリップ・ブーリン演出、宮沢りえ主演「アンナ・カレーニナ」は19世紀ロシアを舞台に、美しく魅惑的なアンナの恋の悲劇。閉館後は新宿の新劇場「シアターミラノ座」を拠点に、こけら落とし公演は人気アニメを舞台化した「舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド」。ベルギー出身のシディ・ラルビ・シェルカウイの構成・演出で、壊滅的状況の地球で強力な敵と戦う少年少女(窪田正孝)の姿を描いた。米アカデミー賞受賞の韓国映画をもとにした鄭義信台本・演出「パラサイト」は寄生一家(古田新太、江口のり子)が起こす悲劇。唐十郎作、金守珍演出「少女都市からの呼び声」は体をガラスに変える手術を受けた少女(咲妃みゆ)とその兄(安田章大)を通して、永遠の友情や愛を描く。劇団☆新感線のいのうえひでのり歌舞伎「天號星」は元禄の時代に裏稼業で名の知れた主人公(古田新太)とその命を狙う殺し屋(早乙女太一)の人格が入れ替わる本格的なバトル時代劇。

2つの劇場の閉館が発表された。俳優座劇場は1954年に俳優座の創立10周年を記念して開場し、戦後の新劇の発展に大きな役割を果たしたが、老朽化と収支の厳しさのため、25年4月で閉場する。また、劇作家平田オリザが芸術監

督を務めるこまばアゴラも24年5月末で閉館する。小劇場の公演が多かったが、閉館時の負債が残っており、コロナ禍や諸物価の高騰もあって、閉館を決断したという。

2024年に創立80周年を迎える俳優座は2月にオーストラリアの劇作家デヴィッド・ウィリアムソン作、森一演出「対話」を上演した。すでに結審した事件の服役者の関係者と被害者の両親が調停人を介した話し合いを通して、関係修復を図る対話劇。6月からは、25年にかけて3年間にわたる80周年記念公演が始まった。15公演19作品を上演する意欲的なラインアップで、第一弾が「この夜は終わらぬ」。若手劇団やしやごの伊藤毅の作・演出で、病院の待合室を舞台に老若男女の様々な国の人が学ぶ夜間中学生を通して、現代の日本社会を見つめ直す。ウクライナのノーベル文学賞受賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ作、菅田華絵構成・演出「ポタン穴から見た戦争」は第二次世界大戦下の子どもたちの記憶を通して、戦争の悲惨さを訴える。アイルランドの劇作家マリーナ・カー作、高岸未朝演出「ラフタリーの丘で」は父親が家族を蹂躪する一家の隠された秘密が明らかになる。フランシス・ヤーチャー・カウイグ作、眞鍋卓嗣演出「閻魔の王宮」は中国のHIV集団感染事件を題材に経済的利益と人の命の選択を描いた作品で、ハヤカワ「悲劇喜劇」賞を受賞した。

文学座の加藤道夫作、的早孝起演出「挿話(エピソード)」。架空の南の島で終戦を知った日本兵が住民や亡霊を通して、戦争の理不尽さに目覚めていく。テネシー・ウィリアムズ作、松本祐子演出「地獄のオルフェウス」は米国の田舎町で雑貨店を営む孤独な女性と街にやってきた若い男の愛と破滅の物語。アリス・バーチ作、生田みゆき演出「アナトミー・オブ・ア・スーサイド〜死と生をめぐる重奏曲」は三世代の女性の物語が舞台上で同時進行し、時には台詞が重なる重奏曲のような異色作。畑澤聖悟作、西川信廣演出「逃げろ！芥川」は、スペイン風邪の流行から逃れようと旅に出る芥川龍之介と菊池寛の前に、芥川作品に登場する人物や芥川と関係した女性が現れて起こる騒動を描く。

劇団民藝のナガイヒデミ作、中島裕一郎演出「ノア美容室」は農村の小さな美容室を舞台に、

老後の生きる喜び、幸せとは何かを問う作品。鐘下辰男作、シライケイタ演出「カストリ・エレジー」は戦争の極限状況を生き抜いた人たちを呑み込む不条理な社会の悲劇。遠藤周作の未発表戯曲を小笠原響が演出した「善人たちは」、戦争前に神学校に通うため渡米したものの。開戦と同時に憎悪の目が向けられる日本人青年の姿を描く。ニール・サイモン作、田中麻衣子演出「ローズのジレンマ」はランプで作家として危機に陥ったローズ(樫山文枝)に訪れた奇跡のような出来事を描く。木下順二作、丹野郁弓演出「巨匠—ジスワフ・スコヴロンスキ作『巨匠』に拠る」はナチスドイツ占領下のポーランドで、命を賭けてマクベスを演じた老人の姿を描いた作品。滝沢修、大滝秀治に次いで、西川明が初めて挑んだ。劇団代表として長い間にわたり民藝を支え、新劇界を代表する演技派の女優でもあった奈良岡朋子さんが93歳で亡くなった。

青年座の土田英生作、金澤菜乃英演出「時をちぎれ」は室町幕府フリークの経営者(山路和弘)の会社を舞台にしたコメディ。水上勉作、宮田慶子演出「金閣炎上」は金閣寺が見習い僧に放火された事件をモチーフにした作品。韓国のイ・ヤング作、須藤黄英演出「黄色い封筒」は、韓国でのストライキにセウォル号沈没事件も絡め、人間関係の破綻と修復を描く。

青年劇場の瀬戸山美咲作、大谷賢治郎演出「行きたい場所をどうぞ」は生きづらさを抱える女子高生と駅の道案内AIロボットの物語。山下惣一原作、高橋正圀脚本、西川信廣演出「老いらくの恋」は老農夫を通して食や日本の農業への愛を描く。イ・ジョンミョン作、シライケイタ演出「星をかすめる風」は、終戦直前に獄死した韓国の国民的詩人ユン・ドンジュの最後の日々を描いた作品。

創立80周年を迎えた文化座は、杉浦久幸脚本、鶴山仁演出「母」は特高警察に虐殺された作家小林多喜二の母セキ(佐々木愛)の生涯を描き、韓国の金義卿作、金守珍演出「旅立つ家族」は韓国の国民的画家と言われるイジュンソプ(藤原章寛)の半生を通して日本人女性との国境を超えた家族愛を描いている。三好十郎作、西川信廣演出「好日」は三好の生前未発表の戯曲で、自らを主人公にした作品。

劇団昂は、第二次世界大戦下のロンドンに実在した女性だけのツアー劇団を描いたイモジェン・スタップス作、千葉哲也演出「WE HAPPY FEWわれら幸運な少数」を上演したほか、ガルシア・ロルカ作、金澤菜之英演出「イェルマ」は子供に恵まれないことに焦燥するイェルマと夫のすれ違いから起こる悲劇。畑澤聖悟作、黒岩亮演出「親の顔が見たい」は学校でのいじめをテーマに、保護者たちが勝手な理屈や言い分などで保身を図ろうとする姿を描いた。12月には定番となったディケンズ作、菊池准演出「クリスマス・キャロル」。

演劇集団円は、和解と寛容をテーマにしたシェークスピア作、中屋敷法仁演出「ペリクリーズ」のほか、作家佐野洋子にオマージュを捧げた角ひろこ作・演出「ヨーコさん」、アメリカの不動産業界を舞台に、一攫千金の夢を追いながら、もがき苦しむ男たち(金田明夫ほか)を描くデイヴィッド・マメット作、内藤裕子演出「グレンギャリー・グレンロス」、恒例のこどもステージで「ぼくは人魚」を上演した。

東演のR・アンダーソン作、鶴山仁演出「歌え! 悲しみの深き淵より」は家族の愛憎を描いた作品で、エミール・ゾラ作、藤井ごう台本・演出「酒場」は19世紀パリを舞台に夢を抱いて家族とともに田舎からやってきた女の成功と転落を描いた。6月に予定された「血を売る男」は中止となった。

劇団銅鑼の創立50周年記念公演第三弾の小関直人作、磯村純演出「アウトカム」は廃業した銭湯での起業プロジェクトに集まった人たちの人間模様。大西弘記作、大谷賢治郎演出「真つ赤なお鼻の放課後」は卒業後の進路に悩む女子高生が主人公。劇団創立者の一人だった鈴木瑞穂さんが96歳で亡くなった。

劇団浅敷童子は、太平洋戦争で海軍が開発した特攻兵器「震洋」の悲劇をモチーフにした「海の木馬」、高い木に登って枝打ちなど森の保全を生業とする「空師」たちを主人公にした「空ヲ喰ラウ」を上演した。いずれも作はサジキドウジで、演出は東憲司。

扉座は、横内謙介作・演出で中島敦の未完の大作「わが西遊記」をベースにした「Kappa〜中島敦の「わが西遊記」より〜」は、沙悟浄の目線からその苦悩、屈託が描かれる。

ミュージカル上演が多い劇団四季は、年末にアヌイの名作「ひばり」を上演した。フランスの窮地を救ったジャンヌ・ダルクの姿を描いた作品で、四季の創立70周年を飾る公演だった。

ホリプロの根本宗子作・演出「宝飾時計」は子役から活躍するも30代で人生の岐路に立つ女優を主人公にした作品で、中学生のころから女優として活動する高畑充希が主演した。村上春樹の人気作をベースにしたイスラエルのインバル・ピントとアミール・クリガー演出「ねじまき鳥クロニクル」は平穏な日々を送っていたトオル(成河、渡辺大知)が奇妙な出来事に巻き込まれる様が描かれる。

シスカンパニーは、宮沢賢治(中村倫也)と精神的な支えだった妹トシ(黒木華)の姿を描く北村想作、栗山民也演出「ケンジトシ」、大ヒット曲がありながら突然解散した兄弟グループ(水谷豊、段田安則、高橋克実、堤真一)の再結成をめぐるマギー作・演出「帰ってきたマイ・ブラザー」、世界的な映画監督ペルイマンが孤独な女性の独白で構成した一人芝居「ヴィクトリア」を大竹しのぶ主演、藤田俊太郎の演出で上演した。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、暗い戦争の時代に突入する中で懸命に生きてきた庶民を描いた栗山民也演出「きらめく星座」、戦争責任、神社の在り方を問う栗山演出「闇に咲く花」(松下洸平)、戦後も旧満州・大連に取り残された劇作家たちの苦悶を描いた鶴山仁演出「連鎖街のひとびと」を上演した。

加藤健一事務所のリー・カルチェイム作、日澤雄介演出「グッドラック、ハリウッド」は名監督だったラッセルを主人公にジェネレーションギャップや世代交代の悲哀をコメディタッチで描いた。ピューリッツァー賞受賞のコバーン作、小笠原響演出「ジーンゲーム」はトランプゲームを通して2人の老人(加藤、竹下景子)の孤独が浮き彫りとなるビターコメディ。

名取事務所のパレスチナ演劇シリーズの「占領の囚人たち」はパレスチナ人政治犯囚とイスラエル人作家による、刑務所内の苛烈な状況を描いたドキュメンタリー演劇。演出は生田みゆきで、制作人が現地滞在を経て上演された。カナダの劇作家ニコラス・ピヨンの「屠殺人ブッチャー」と新作「慈善家・フィランソロピスト」

を上演。演出が生田みゆきに代わった「ブッチャー」は警察署に運び込まれた老人の身元を巡る物語で、小笠原響演出「慈善家」は、薬害事件を抱える大会社の経営者による美術館への寄付金を巡る、社会的な構造の問題から人間の性までシニカルな視点で描いた。

トムプロジェクトは、高校のコーラス部を舞台に人間模様を描く、なるせゆうせい作・演出「ソングマン」、共同生活をしながらK-POPアイドルの押し活をする4人のおばさん(羽田美智子、柴田理恵ら)を主人公にした「沼の中の淑女たち」を上演。

トータルステージプロデュースは、ペーター・ハントケ作、ウィル・タケット演出「カスパー」は生まれてから16年間、人劇社会から隔離されて育ったカスパー(寛一郎)が言葉を知ることによって社会に囚われていく姿を描く。アンドリュー・ボヴェル作、荒井遼演出「これだけはわかってる」は家族の再生の物語。マクベス夫人(天海祐希)を主人公にしたジュード・クリスチャン作、ウィル・タケット演出「レイディマクベス」は英国の俳優アダム・クーパーとの共演が話題となった。

CATプロデュースは、シェークスピア作、井上尊晶演出「ロミオとジュリエット」を高杉真宙、藤野涼子のコンビで上演し、マイケル・フレイン作、森新太郎演出「ノイゼス・オフ」は舞台の表裏で展開するシチュエーションコメディ。

海外からの来日公演では、バリ郊外に拠点を持つフランス現代演劇を代表する「太陽劇団」の22年ぶり2度目の公演が実現した。主宰者で日本文化への造詣が深いムヌーシュキンの新作「金夢島(かねむじま)」で、6年前の佐渡島訪問で着想を得た作品。病床の女性の夢を描く形で、日本の架空の島を舞台に演劇祭で町おこしを図る市長派と、カジノリゾート開発を目論む海外資本グループの対立し混乱する中で、能など日本の伝統文化を織り込んだ。

はやし・なおゆき

2020年に退社するまで日刊スポーツ新聞社で主に演劇・演芸を担当し、年間300本以上の舞台を観劇。文化庁芸術祭、芸術選奨、鶴屋南北戯曲賞の選考委員、国立劇場養成事業委員会委員などを務める。



[ミュージカル]

## 2023年のミュージカル ―多岐にわたり盛況見せる

横溝幸子

3年半に及ぶ新型コロナが5類移行後も、影響は残ったが、2023年のミュージカル界全体を見渡すと、2020年以降の上演中止作品を含めて海外、オリジナル作品とも、大作から小品まで数えきれぬほどの上演ラッシュになった。英米仏にウィーン作品が入り乱れる中で、韓国ミュージカルが台頭した。原作は映画、小説、アニメ、漫画、ゲームと多岐にわたる。

### ジャニーズ事務所と宝塚歌劇団

ミュージカル界の一翼を担う2大勢力が、社会問題に発展し、批判にさらされる事件が大きく報道された。

第1はジャニーズ事務所。堂本光一主演「Endless SHOCK」や「DREAM Boys」など帝劇で5ヵ月公演を行ってきたジャニーズ事務所が、ジャニー喜多川の性加害問題をきっかけに、ジャニーズ帝国が一夜で崩壊。10月17日付でジャニーズの名称は永久に消滅した。被害者救済の補償対応会社「SMILE-UP」(東山紀之社長)とタレント業務の「STARTO ENTERTAINMENT」(福田淳社長)が組織された。ジャニー喜多川はギネス認定と2002年度菊田一夫演劇賞特別賞が取り消された。「ジャニーズWEST」は、「WEST」と改称され、所属タレントが次々退所した。12月の帝劇公演は「A.B.C座星(スター)劇場2023～5Stars Live Hours」のタイトルに変更されたが、A.B.C-Z5人のメンバーの内、河合郁人が12月21日の千秋楽で脱退した。

第2は、宝塚歌劇団。宝塚大劇場宙組公演「PAGAD」(田淵大輔作・演出)の初日(9月29日)終了後、宙組所属の研7娘役の自死(9月30日)の報道で、過重労働、パワハラ、イジメが表面化した。劇団側は報告書で過重労働は認められたが、「イジメやハラスメントは確認できなかった」と結論づけたため、反響が広がり木場健之理事長は12月1日付で退任した。専務理事の村上浩爾が理事長に就任。過密な公演スケジュールの見直しを始めた。

宙組の「PAGAD」は、芹香斗亜・春乃さくら新トップコンビお披露目公演だったが、宝塚大劇場(10月1日以降)と東京宝塚劇場(11月25日～12月24日)の公演が中止された。24年の宙組公演「エクスカリバー」(2月25日～3月3日 博多座、3月16日～26日 梅田芸術劇場メインホール)と風色日向初主演「MY BLUE HEAVEN」(3月6日～17日 パウホール)も中止が決まった。宙組の天彩峰里の月組、月組のきよら羽龍の宙組への組替えも撤回され、24年の一大イベントとなる「宝塚110周年記念式典」「タカラザカススペシャル」「大運動会」も中止された。

事件とは別に1年間を通してみると各組とも充実した舞台が多かった。6月宙組の「カジノロワイヤル」(小池修一郎作・演出)で真風涼帆・潤花のトップコンビが退団した。星組の礼真琴が「1789」でロナンを骨太に演じた。月組は若き菅原道真を描いた「応天の門」(田淵大輔作・演出)、分断された東西ドイツの壁をへだてた恋を描いた「フリーゲル」(斎藤吉正作・演出)の月城かなと・海乃美月、花組「うたかたの恋」(柴田侑宏脚本 小柳奈穂子潤色・演出)の柚香光・星風まどか、雪組「ライラックの夢路」(謝珠栄作・演出)の彩風咲奈・夢白あやら各組のトップコンビが実力を示した。

110周年の2024年には、花組の柚香光・星風まどかが5月「アルカンシェル」で、月組の月城かなと・海乃美月が7月「Eternal Voice」で、雪組の彩風咲奈が10月「ベルサイユのばら」で、いずれも東京宝塚劇場の千秋楽で宝塚を卒業する。23年の退団者は光月るう、宙組組長の寿つかさ、蓮つかさら45人が卒業した。

### 創立70周年を迎えた劇団四季

浅利慶太ら10人が「演劇界に革命を起こす」と劇団四季を結成。2023年7月14日、創立70周年を迎えた。アヌイやジロドゥ作品から、「イエス・キリスト＝スーパースター」初演後はミュージカル劇団へと近付き、「キャッツ」(名

古屋四季劇場)は11月11日、日本上演40周年に、「ライオンキング」(有明四季劇場)は12月20日、25周年を迎えた。「美女と野獣」(舞浜アンフィシアター)は10月29日、日本公演通算6000回を達成。東京ではほかに「アナと雪の女王」(春)、「アラジン」(海)がロングラン中。10年ぶりに「ウイキッド」(秋)が東京で上演された。70周年にふさわしく、自由劇場では「ジーザス・クライスト=スーパースター」(ジャポネスク版)、ファミリーミュージカル「ジョン万次郎の夢」「エルコスの祈り」のほか、原点に戻り、ジャン・アヌイ作「ひばり」で1年を締めくくった。名古屋、京都、大阪はじめ全国展開の児童招待プロジェクト「こころの劇場」が3年ぶりに再開された。「ニッセイ名作シリーズ」(日生劇場)が復活、小学3~4年生を対象に「ジャック・オー・ランド〜ユーリと魔法の笛」を上演するなど大人から子どもまでレパトリーが揃っている。全上演回数は2900回、観客動員数は315万3100人、前年より70万人増と好調だ。

「バケモノの子」(22年4月30日~23年3月21日 秋)は、11カ月、延べ21万8000人を動員、オリジナル・ミュージカル初演で最長、最大動員数を記録。24年5月から「ゴースト・レディ」(藤田和日郎原作 高橋知伽江脚本・作詞 富貴晴美作曲・編曲 スコット・シュワルツ演出)を上演する。浅利慶太没後も劇団四季は一丸となって突き進んでいる。

## 大作揃いの東宝 梅田芸術劇場

ミュージカルを手がけるプロダクションが増える中で、大作に挑んだ東宝と梅田芸術劇場が健闘した。とくに東宝の「ムーラン・ルージュ!ザ・ミュージカル」(6月21日~8月31日)が光った。パズ・ラーマン監督映画のミュージカル化だが、真っ赤な照明、風車や象のオブジェと帝劇全体がナイトクラブに変貌した。芸術家志望のクリスチャン(井上芳雄・甲斐翔真)と歌姫サティーン(望海風斗・平原綾香)の恋、それを伯爵(伊礼彼方・K)が邪魔をする。エルトン・ジョンの「ユア・ソング」やクイーン、プレスリーらのラブソングが数々歌われ、目くるめく恋や濃厚なダンスが圧感。松任谷由美ら17人が訳詞を担当。望海風斗と井上芳雄の情熱的演技と歌唱力が際立った。

人種差別や偏見を描いた「RAGTIME」(テレンス・マクナリー脚本 リン・アレニス歌詞 ステイーヴン・フラハティ音楽)も出色の舞台だ。差別に苦しむユダヤ移民ターテ(石丸幹二)と黒人ピアニスト コールハウス(井上芳雄)を裕福な白人のマザー(安蘭けい)が包み込む。闘いに破れたコールハウスの死後、ターテと再婚したマザーがコールハウスの子どもを引き取り、「分断と差別」から「融合の未来」を暗示する。演出の藤田俊太郎は、白人は白、ユダヤ人はグレイ系、黒人はカラフルと衣裳を色分けして人種を表現した(9月9日~30日 日生劇場)。

「エリザベート」のミヒャエル・クンツェ(脚本・歌詞)とシルヴェスター・リーヴァイ(音楽・編曲)コンビの新作が「ベートーヴェン」(12月7日~29日 日生劇場)だ。耳の不安を抱えるベートーヴェン(井上芳雄)は、夫のあるアントニー(花總まり)を激しく愛する。井上のベートーヴェンは狂ったように演じ歌う。全編が歌で綴られるが難曲が多い。

帝劇の堂本光一主演「チャーリーとチョコレート工場」(10月9日~31日)は、カラフルな菓子の装置の中で、子役が活躍。オリジナル作品「SPY×FAMILY」(3月8日~29日)は、ちぐはぐ家族の面白さ。小池修一郎脚本・歌詞・演出「LUPIN」(11月2日~28日)はドーブ・アチア作曲が軽妙。ルパンに若手の古川雄大を起用し、次代のミュージカル俳優の実力を示した。カリオストロ伯爵夫人の柚希礼音とWキャストで、6月に宝塚を退団した真風涼帆が起用された。シアタークリエ「のだめカンタービレ」(二ノ宮知子原作 上田一豪脚本・作詞・演出)は、音楽大学生(三浦宏規)につきまとう後輩の野田恵(上野樹里)がユニークな存在だ。

再演の「ジキル&ハイド」は、石丸幹二のほか柿澤勇人が新たに加わった。「天使にラブ・ソングを」は、森公美子と朝夏まなとらおなじみの顔ぶれ。ファイナル公演(22年2月 日生劇場)が7回で中止された「ラ・マンチャの男」が続演された(4月14日~24日 よこすか芸術劇場)。長い階段の装置をなくしたが、80歳の松本白鸚がセルバンテス、キホーテ、キハーナを執念で演じきった。市川染五郎を名乗っていた1969年の初演から「見果てぬ夢」を追い続けて54年間で1324回の上演記録を樹立した。

梅田芸術劇場は「ドリームガールズ」(トム・アイン脚本・作詞 ヘンリー・クリーガー音楽 眞鍋卓嗣演出)を日本人キャストで初演した(2月4日～14日 東京国際フォーラム ホールC)。ディーナ(望海風斗)、エフィ(福原みほ・村川絵梨)、ローレル(sara)の3人の黒人歌手が差別と闘いながら成功し、のちに解散する。新人のsaraが健闘した。

「太平洋序曲」(ジョン・ワイドマン脚本 ステューヴン・ソンドハイム作詞・作曲 マシュー・ホワイト演出)は、梅田芸術劇場とロンドンのメニエールチョコレートファクトリー劇場の提携初共同制作。2幕物を1幕構成にした。香山弥左衛門(海宝直人・廣瀬友祐)、ジョン万次郎(ウエンツ瑛士・立石俊樹)、将軍と女将(朝海ひかる)、狂言回し(山本耕史・松下優也)ら中堅若手の活躍が目立った。北斎の絵など和風にまとめたポール・ファーンズワースの美術が美しい(3月8日～29日 日生劇場)。

スタンダード原作「赤と黒」(アレクサンドル・ボンシュタイン脚本 ザジ&バンサン・バギアン作詞 ウィリアム・ルソー&ソレル作曲 ジェイミー・アーミテージ演出)のジュリアン・ソレルは若手の三浦宏規。4月に宝塚星組の礼真琴が「Le Rouge et le Noir」のタイトルで上演した作品の男女混合版。ストーリーテラーを兼ねるジェロニモ役の東山義久のしなやかなダンスが魅力的(12月3日～27日 東京芸術劇場プレイハウス)。

再演の「PHANTOM」は城田優が演出し、加藤和樹とファントムを競演。「アナスタシア」は葵わかな・木下晴香で、海宝直人の詐欺師が軽妙。麻実れいの皇太后に存在感がある。

### 子役が活躍するホリプロ作品

初演の「キング・アーサー」(ドゥヴ・アチア音楽・脚本・歌詞 オルピア日本語台本・演出)は、アーサー(浦井健治)とメレアガン(伊礼彼方・加藤和樹)の対決が勇壮(1月12日～2月5日 新国立劇場中劇場)。「BAND'S VISIT」(クタマール・モーゼス台本 デヴィッド・ヤズベック作詞・音楽 森新太郎演出)は、エジプトの音楽隊と言葉の通じないイスラエル人との心の交流が暖かい。風間杜夫、新納慎也、濱田めぐみら大人の風格で見せた(2月7日～23日

日生劇場)。「マチルダ」(デニス・ケリー台本 ティム・ミンチン作詞・作曲 マシュー・ウォーチャス演出)は、ホリプロと英国ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーとの提携公演。5歳のマチルダが校長(小野田龍之介・大貫勇輔・木村達成)に勇気を持って立ち向かう。「ファインディング・ネバーランド」は4人の子持ちの未亡人(濱田めぐみ)と出会ったジェームズ・バリ(山崎育三郎)が、「ピーターパン」の着想を得る話。「スクール・オブ・ロック」は、ロックバンドのデューイ(柿澤勇人・西川貴教)が生徒にロックの楽しさを教え、演奏までする。子役たちが達者な演技を見せた。

43年目の「ピーターパン」は、演出が長谷川寧となり、花盛りのネバーランドが構成舞台の3幕物に変わった。フック船長は小野田龍之介、ピーターパンの山崎玲奈は11代目と出演者の顔ぶれも新しくなった。「生きる」は鹿賀丈史と市村正親の渡辺勘治が哀愁を帯びて秀逸。市村は第12回岩谷時子賞を受賞した。

### 多彩な海外ミュージカル

ミュージカルの制作会社が多数ある中で松竹が新橋演舞場を拠点に3作品を上演した。ロンドン・ミュージカル「ルーザーヴィル」(3月5日～22日)は、コンピューターオタクの高校生(井上瑞稀 HiHi Jets)が主人公。「ピートルジュース」(8月4日～27日)は、ティム・バートン監督映画をもとに死後の世界の厄介者をジェシー(SixTONES)が主演。「シェルブールの雨傘」(11月4日～26日)は、京本大我のギイと宝塚雪組のトップ娘役の朝月希和が退団後初の舞台出演でジュヌヴィエーヴを切々と演じた。さらに「マイ・フェア・レディ」のアラン・ジェイ・ラーナー(脚本)、フレデリック・ロウ(音楽)コンビによる「CAMELOT」(10月7日～28日 日生劇場)を坂本昌行のアーサー王、桐山照史(WEST)のランスロットで初演した。

新国立劇場初制作のミュージカル「東京ローズ」(メリヒ・ユーン カーラ・ボルドウィン台本・作詞 ウィリアム・パトリック・ハリソン作曲)は、2019年のエジンバラフェスティバル初演作品。病身の叔母の見舞いで初来日した日系2世のアイバが、太平洋戦争突入で帰国できぬまま、日本で海外放送のアナウンサーにな

る。戦後、日本のプロパガンダ放送に加担した東京ローズとされ、アメリカで国家反逆罪に問われて、国籍回復まで30年かかった戦争犠牲者の半生の物語。演出の藤田俊太郎は年代順に6人の女優(飯野めぐみ、シルビア・グラブら)がアイバを演じる手法をとった。936人のフルオーディションの中から選ばれた6人だが、全編殆ど歌という難しさが課題として残った。

「ファンタスティックス」のハーヴェイ・シュミットの死後(2018年)も台本・作詞を書き続けたトム・ジョーンズが、2023年5月、95歳で死去した。その遺作とも言える「GEEZERS〜じいさんばあさんズ」を演出の勝田安彦が哀悼の意を込めて上演した(12月14日～16日 THE GIGLES)「I DO I DO」の老後版に近い小品で、宮内良と宮内理恵が、老後の生活は幸せだったかを語り合い、歌い踊った。しみりと考えさせられる作品になった。

ビートルズは結成当時5人だったという「BACK BEAT」、過酷な労働時間に対して闘った女性を描いた「FACTORY GIRLS」、若者たちの恋を描いた「スライス・オブ・サタデイト」など、海外ミュージカルは多種多様。その中で「マリー・キュリー」「サンキュー・ベリー・ストロベリー」「DEVIL」「ミア・ファミリー」「ダーヴィン・ヤング」など韓国ミュージカル上演が目立ってきた。売り込みと紹介を兼ねた「K-Musical Road show in Tokyo」が初めて東京で開催(12月14日)され、「ブラムス」「最後の事件」などダイジェスト版5作品が紹介された。韓国側も積極的な姿勢を見せている。

## オリジナル作品も花盛り

歴史上の人物からイジメ、差別までどんな題材もミュージカルになってしまう。中学生のイジメや自殺を扱った「カラフル」(森絵都原作 小林香脚本・作詞・演出 大畠慶子音楽)は死んだはずのぼく(鈴木福)の魂がガイド役の天使(川平慈英)の導きで自殺した真の中に入り込み、両親や友人との関係が明らかになってゆく。イツフォーリーズの「聲の形」(大今良時原作 板垣恭一上演台本・作詞・演出 桑原まこ作曲)は、小学6年生の将也(島太星)が聴覚障害の硝子(山崎玲奈)をイジメて転校させた。5年後に再会した時、硝子をかばった将太は、し

だいに硝子への愛に目覚めてゆく(10月4日～8日 サンシャイン劇場)。「バウムクーヘンとヒロシマ」(栗山ひろみ原作 大西弘記脚本・作詞 田中和根音楽 磯村純演出)は、似島でバウムクーヘン作りをした小学生が、収容所内のドイツ人が伝え、売っていた場所が原爆ドームになり、祖父も原爆体験者だったと初めて戦争があったことを知る(3月26日～30日 俳優座劇場)。2本とも堅実な作品である。

実在の人物を取り上げたミュージカルが「浅草キッド」(福原充則脚本・演出 益田トッシュ音楽)。ビートたけし(林遣都)の売れなかった青春時代で、武と師匠の深見千三郎(山本耕史)の関係が中心。「李香蘭」(岡本貴也脚本・作詞 鎌田雅人作曲 良知真次演出・振付)は、李香蘭(西内まりや)と戦後の山口淑子(安寿ミラ)と同一人物を2人で演じ分けた。ダ・ポンテの生涯を描いた作品が2本登場した。「コジ・ファン・トゥッテ」「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」と傑作を書きながら、モーツアルトの陰に隠れてしまった台本作家ダ・ポンテが主役になった。ヨーゼフ2世の死後、ウィーンからロンドン、さらにアメリカで生涯を終えた。「逃げろ！」(鈴木勝秀台本・演出 大島吾郎作曲)は、A.B.C-Zの橋本良亮主演(エイベックス制作 2月21日～3月1日 新国立劇場中劇場)で「DA Ponte」(大島里美作 笠松泰洋音楽 青木豪演出)は、海宝直人が主演した(映画演劇文化協会制作 6月21日～25日 シアター1010)。若手の海宝直人は「太平洋序曲」「アナスタシア」と活躍している。

音楽座は遠藤周作原作の「泣かないで」と結成時に初演した「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」を再演し、オリジナル作品一筋に歩んできた劇団の強さを示した。音楽座育ちの高野菜々が客演した「生きる」で小田切とよを生き生きと演じ実力を示した。ミュージカル座も「東京ミュージカル」「ハリウッドは大騒ぎ」などを上演し、新型コロナから再起した舞台を見せた。

## 来日公演も回復のきざし

経営破綻したシルク・ドゥ・ソレイユが再結成され、5年ぶりの来日公演で「アレグリア」を上演した(2月8日～6月4日 お台場ピクトップ)。東急シアターオーブではジャン・ポール・ゴルチェの「ファッション・フリー

ク・ショー」(5月19日～6月4日)が、キャバレーショーとファッションショーが合体したような演出で、ダンスと音楽で楽しく見せた。「ウエストサイド・ストーリー」は、2022年12月、ミュンヘン初演のニューバージョン。装置も簡単に移動向き(7月5日～23日)。掃除道具が楽器になる「ストンプ」(8月16日～27日)は13年ぶりの来日公演だ。11回目、5年ぶりの「バーン・ザ・フロア」(6月14日～18日 日本青年館)は、16人のダンサーが焔のように踊る中で西川貴教が日本人歌手として初参加した。

訃報として、宝塚から映画女優を経て参議院議員になった扇千景さん(89)が3月9日、「ジキル&ハイド」に出演の東宝現代劇の丸山博一さん(88)が9月29日、「洪水の前」などで活躍の財津一郎さん(89)が10月14日に亡くなった。

## 2023年のミュージカル・ベスト10

ミュージカル界の全体像をつかむには、専門誌「ミュージカル」による2023年度ミュージカルベスト10が参考になる(評論家・ジャーナリスト21名)。

### 《作品BEST10》

- 第1位「ラグタイム」(東宝 演出 藤田俊太郎)
- 第2位「ムーラン・ルージュ! ザ・ミュージカル」(東宝 演出 A・ティンバース)
- 第3位「ドリームガールズ」(梅田芸術劇場 演出 眞鍋卓嗣)
- 第4位「スクールオブロック」(ホリプロ+フジテレビジョン他 演出 鴻上尚史)
- 第5位「太平洋序曲」(梅田芸術劇場 演出 M・ホワイト)
- 第6位「ベートーヴェン」(東宝 演出 G・メーメルト)
- 第7位「ザ・ビューティフル・ゲーム」(東宝+東京グローブ座 演出 瀬戸山美咲)
- 第8位「バンズ・ヴィジット」(ホリプロ他 演出 森新太郎)
- 第9位「チャーリーとチョコレート工場」(東宝 演出 ウォーリー木下)
- 第9位「マチルダ」(ホリプロ他 演出 M・ウォーチャス)

### 《再演賞》

「ラ・マンチャの男」(東宝 演出 松本白鸚)

### 《演出家賞》

藤田俊太郎(「ラグタイム」「東京ローズ」)

### 《男優BEST10》

- 第1位 井上芳雄(「ジェーン・エア」「ムーラン・ルージュ!」「ラグタイム」「ベートーヴェン」)
- 第2位 松本白鸚(「ラ・マンチャの男」)
- 第3位 柿澤勇人(「ジキル&ハイド」「スクールオブロック」)
- 第4位 石丸幹二(「ジキル&ハイド」「ラグタイム」)
- 第5位 海宝直人(「太平洋序曲」「ダ・ポンテ」「アナスタシア」「ベートーヴェン」)
- 第6位 堂本光一(「Endless SHOCK」「チャーリーとチョコレート工場」)
- 第7位 山本耕史(「太平洋序曲」「浅草キッド」)
- 第8位 spi(「ドリームガールズ」「シュレック」)
- 第9位 伊礼彼方(「キングアーサー」)
- 第9位 古川雄大(「LUPIN」)
- 第9位 三浦宏規(「のだめカンタービレ」「赤と黒」)
- 第9位 山崎育三郎(「ファインディング・ネバーランド」)
- 第9位 屋良朝幸(「マリー・キュリー」「天翔ける風に」「The Agent」)

### 《女優BEST10》

- 第1位 望海風斗(「ドリームガールズ」「ムーラン・ルージュ!」)
- 第2位 濱田めぐみ(「バンズ・ヴィジット」「ファインディング・ネバーランド」「スクールオブロック」「ジョン&ジェン」)
- 第3位 礼真琴(「ディミトリ」「JAGUAR BEAT」「Le Rouge et le Noir」「1789」)
- 第4位 真彩希帆(「ジキル&ハイド」「ファントム」「LUPIN」)
- 第5位 安蘭けい(「キングアーサー」「ラグタイム」)
- 第6位 木下晴香(「ザ・ビューティフル・ゲーム」「アナスタシア」「ベートーヴェン」)
- 第7位 愛希れいか(「マリー・キュリー」)
- 第8位 上白石萌音(「ジェーン・エア」)
- 第8位 月城かなと(「応天の門」「DEATH TAKES A HOLIDAY」「フリーゲル」「万華鏡百景色」)
- 第8位 森彩香(「泣かないで」「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」)

よこみぞ・ゆきこ

演劇評論家。日本演劇協会理事。都民劇場評議員。歌舞伎サークル企画委員。時事通信社文化部編集委員を経て文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興会演劇専門委員、日本大学芸術学部非常勤講師を歴任。第51回新劇製作者協会賞受賞。著書に「夢を語る役者たち」ほか。

[地方演劇]

## 2023年の地方演劇概況

森 洋三

### 文化庁の京都移転

文化庁が2023年3月27日、移転先の京都で業務を開始した。明治維新以降、中央省庁の地方移転は初のケースで、その前日、京都市内のホテルで開かれた「文化庁京都移転祝賀の集い」に岸田文雄首相が出席。「移転を機に京都を中心に新たな文化振興に取り組んでいきたい。伝統×創造で日本を元気に、という思いで、都倉(後一)文化庁長官のイニシアティブの下、京都から食文化や文化観光などをはじめ、新たな価値を生み出し、広く世間に発信していきたい」と挨拶。国立文化財修理センターの整備、我が国の建築文化の価値を確立する取り組みを新たに進めるなど具体的な施策も明らかにした。

ほぼ7年がかり、故・安倍晋三首相のもとでスタートした「東京一極集中」を是正する「地方創生」の顕著な実績になった。文化庁では5月の連休明けには都倉長官と6つの部署(政策課、文化資源活用課、文化財第一課、文化財第二課、宗務課、生活文化創造担当参事官)の職員390人(全職員590人の約70%)が京都市上京区の元京都府警本部の本館庁舎を整備、移転して本格業務を始動。ただ次長、宗務課については業務に一定の区切りがつくまで東京勤務になる。ちなみに東京に残った部署は企画調整課、文化経済・国際課、国語課、著作権課、芸術文化担当参事官、文化拠点担当参事官。

### 京都を文化首都に

京都府・市は「歴史と伝統が息づく“文化首都”」を掲げて府・市一体となって誘致運動を展開した。「祝賀の集い」の27日夜はJR京都駅前の京都タワーを文化庁のシンボルカラーの紅白色にライトアップして移転を早速アピール。9月には京都府・市・京都商工会議所を共同代表とする「文化庁連携プラットホーム」を立ち上げた。ロームシアター京都で開いたオープニングセレブレーション「9月8日、始まる『きょう、ハレの日、』」を皮切りに、文化庁京都移転記念

事業「きょう、ハレの日、」が令和6年3月まで府内各地で行われる。連携事業は約250件、その高いボルテージがうかがわれる。

一方、「2025年大阪・関西万博」が25年の4月13日から184日間、大阪市此花区の夢洲で開催される。各国・都市のパビリオンなど開催日に工事が完成できるのか懸念する声が聞かれるものの、関西あがてのビッグイベントになるのは間違いない。大阪では23年に松竹座が開場100周年を迎えてタイトルのついた記念公演を行い、前年の22年にはOSK日本歌劇団が創立100周年を祝った。OSKはNHK連続テレビ小説「ブギウギ」のヒロイン笠置シズ子元団員だったことや現役スターの出演などで人気急上昇。23年は関西にホットな話題が相次ぎ、いずれ関西演劇界にもそうした熱気が訪れる気配がする。

### チャットGPTで脚本

いま対話型人工知能(AI)「チャットGPT」が波紋を呼んでいるが、地方劇界でも早々とチャットGPTを活用した公演が相次いだ。その一つは浜松市を中心に演劇活動するアマチュアチーム「ムナポケットコーヒーハウス」(略称ムナポケ、永井宏明代表)が6月に浜松市中区の鴨江アートセンターで上演した爆速ワークショップ演劇公演「この世界のオニオとヒョットコエット」(45分)。その手法はワークショップで参加者から募った「赤鬼」「ひよっこ」「柏餅」「チューリップ」「革命」の5つのキーワードを元にチャットGPT3.5で原案作成、これを永井が戯曲としてまとめて演出した約45分の舞台。

もう一つは9月に函館市地域交流まちづくりセンターで上演された「cafe星月堂〜かぐや姫は月に願わない」。函館市内の劇団・だいたい企画(林佐和子代表)と演劇サークル・Let'sえんげきぶ(伊藤尚代表)の共同企画公演の演目選別にチャットGPTの活用を決め、最初に「昔話『かぐや姫』」をパロディにして1時間の脚本にし

たい。あらすじを3つ提案してください」と要請。提案が3本出てきて、さらに「できれば主要な登場人物を3人に」など合計で10回くらい回答させ、それらを参考に伊藤代表が舞台に使用できそうな要素を選び出し再構成して台本にまとめた。同代表がその経緯をネットで公開しており、了解を得て一部を紹介すると「まとめ」としては「結局、そのまま使えるというものはなかった」「面白い発想が出てこない、煮詰まってしまった、というときに使うと、自分では思ってもみなかったことを言ってくれるので助かりました」と感想を語っている。

チャットGPTは無料で簡単に利用できる革新的なサービスとあって世界的にも急速に普及。人口当たりの利用者数は日本が世界一という。23年5月の全米脚本家組合、映画俳優組合が長期ストでアピールしたチャットGPTがもたらす不利益も大きな話題になった。小説や脚本が得意の分野とされ、日本の演劇界も大きな問題提起として受け止める必要があると思われるが、地方演劇に早々と出現し始めたことに注目して見守りたい。

## 盛んな市民劇場・市民劇

いま地方劇界でとりわけ目立っているのが市民劇・ミュージカルだ。コロナ禍からの立ち直りもあり、公共施設などを会場に市民劇団や演劇カンパニーが文化や史跡、郷土の偉人などをテーマにした地元密着型の舞台が数多く上演されている。背景には2014年施行の劇場法(劇場・音楽堂等の活性化に関する法律)があり、文化庁の指針「文化芸術が地域を活性化する」の浸透もあるのだろう。少し古いが特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター(坂田裕一理事長)が2018年3月に出した提言書「震災から7年 被災地に新たなコミュニティを生む」に、市民参加の舞台づくりに関した47都道府県の芸術文化振興担当課へのアンケート調査、35都道府県からの回答が記載されている。

「一般市民公募を中心とした市民参加の舞台公演の有無」を見ると、「ある」と回答したのが66%、「ない」が26%。市民劇団、市民劇場が各地で活発に活動していることが分かる。さらに「各都道府県の市民参加舞台実施数」では上位5県に長崎、山梨、岩手、千葉、兵庫が入ってい

る。ジャンル分けが「演劇・ミュージカル」「音楽」「オペラ」「民俗芸能・伝統芸能」の4分野。「演劇・ミュージカル」では岩手が最も多く総計20のうち18件。第2位の兵庫県の8件に比べても突出している。

その市民劇。20年、30年も継続して同一作品・テーマで上演を続ける市民劇団が少なくない。栃木・那須塩原市の劇団なすの(辻本み子代表)の9月公演「**那須野の大地**」(広島友好作、鈴木龍男演出)は22年目を迎えた。スタート時は旧西那須野町が制作していたが、現在は市民劇団なすのが継続中だ。また三重・桑名市の劇団すがお(加藤武夫代表)は毎夏、桑名の空襲被害・戦争の悲劇を伝える朗読劇公演を40年近く前から平和を願う桑名市民共同企画との共催で行っている。7月に「消えない夏の日 桑名の空襲 桑名が燃えている」(石垣まさし構成・演出)を上演。北海道・函館市では1988年以来、NPO法人市民創作・函館野外劇の会(中村由紀夫代表)が7月、土方歳三や石川啄木らが登場する開拓歴史大スペクタクル、35回記念「星の城、明日に輝け」(実行委員会制作)を五稜郭公園広場で。延べ2,500人の市民が出演した。9月の島根・しまね文化振興財団など制作の島根県ミュージカル「**あいと地球と競売人**」(東龍男脚本・作詞、和田史朗演出)が公演30周年。出雲市の小学6年生・坪田愛華が死去直前に地球環境保護の大切さを描いた漫画『地球の秘密』をもとに劇化、30年間で延べ4,000人の子供・市民が受け継いでいる。沖縄・うるま市民芸術劇場で23年続く、中高生の沖縄版ミュージカル「**肝高の阿麻和利**」(嶋津与志脚本、平田大一・蔵當慎也演出)。風雲児・勝連城10代目城主の半生が描かれ8月には東京公演も行った。

## 多彩な岩手の市民劇場

地域別で見ると岩手県が賑やか。花巻市民劇場は「宙の巡りのめあて～宮沢賢治戯曲四部作」(高橋信也脚色・演出)を、奥州市民劇が奥州市水沢出身で関東大震災後の東京復興に尽力した後藤新平の生涯をたどる「**新平さんの大風呂敷～後藤新平物語**」(渡部明脚本・演出)をスタッフ・キャスト合わせ約150人の大人数で上演。奥州胆沢劇場でも奥州市胆沢のタニシ民話をもとに「つぶつこ太郎伝」(遠藤達郎脚色、藤原実

美江演出)、一関市の藤沢市民劇場は朗読劇「藤沢本郷繁盛記」(AKH原作、一関藤沢市民劇場制作班脚本、千葉憲一演出)。毎年、伝承・史実がテーマの創作劇を上演している。また柳田国男の「遠野物語」で知られる遠野市の第48回遠野物語ファンタジー「きつねの絵筆」(萩野友理恵原案・脚本)はいたずらきつねと供養絵師の物語。遠野市民センターの自主事業として1976年以来、地元の昔話や民話を題材に市民キャスト・スタッフで舞台化している。

三重県では松阪市の「小津安二郎と東京物語」(岸武男脚本・演出)。松阪しょんがい音頭と踊り・文化財指定20周年記念事業の一環で劇団松阪ドラマシティ、劇団津演、劇団白つばきの3劇団が出演。映画「東京物語」のストーリーを踏襲しつつ小津監督も撮影現場に登場。監督は松阪市の小学校、旧制中学を卒業、同市の小学校代用教員を勤めたことがある。70年以上の歴史を持つ劇団上野市民劇場(伊賀市、杉森正美代表)は空襲や軍需工場徴用をテーマの朗読劇「あの日を忘れない」(福北辨構成・演出)。亀山市地域社会振興会主催による伊勢亀山藩と備中松山藩との城主交換劇、亀山ミュージカル「たいへんじゃ〜伊勢亀山から備中松山」(小嶋希恵脚本・演出)は公募市民46人で上演した。

異色の公演は名古屋入管収容中に亡くなったスリランカ人女性・ウィシュマ・サンダマリさんの手紙を元にした「NAGOYA同時発信ウィシュマ」。劇団名古屋や名芸、おはなしトランクなど7劇団・団体が朗読劇「名古屋入管収容所から届いた13通の手紙」(劇団名古屋)や朗読「ウィシュマさんを知っていますか?」(劇団名芸、おはなしトランク)など告発劇として2日間にわたり同時上演した。

九州・沖縄も盛んだ。鹿児島県で奄美大島・龍郷町教育委員会など主催の青少年育成ミュージカル「KIKUJIRO」(松永太郎脚本・演出)。西郷隆盛と愛加那の長男で、西南戦争に生き残り、第2代京都市長をつとめた西郷菊次郎の一生を描く。変わりダネは奄美群島・沖永良部島の小学生〜高校生の劇団えらぶ百合物語がユリ球根栽培の歴史を絡めた島民創作ミュージカル「えらぶ百合物語」(松永太郎作・演出)を。初の島外、鹿児島・始良市公演も行った。奄美群

島・瀬戸内町のせとうちシアター塾が奄美群島日本復帰70周年記念事業として「私たちの望むものは」(富岡忠文脚本・演出)を文化庁の文化芸術創造拠点形成事業として上演。8年間のアメリカ軍政下にあった奄美群島の復帰運動を描き小学生から60代までの町民が参加。熊本県では天草市出身の早世の歌手・横田良一の生涯を描く音楽劇「天草小唄ものがたり」(平野有益原作・脚本、堀田清演出)が浜畑賢吉・監修で市民センターなど各地で上演中。

郷土の先覚者を取り上げた公演も。青森・八戸市の劇団やませ(大館登美子代表)が大正から昭和初期にかけ女性解放運動に身を投じた同市出身の永嶋暢子の半生を描く「ひたむきに生きて」(佐々木功作・演出)を。変わったところでは新潟市の大衆演劇劇場「古町芸芸場」の大衆演劇の劇団による新作「明和義人伝」(渡辺和徳作、水廣勇太構成・演出)。藩政に抵抗、2カ月にわたって町民自治を行った「明和騒動」の中心人物・涌井藤四郎たちを劇化。長野ではCaniba(長野市)が戸隠に伝わる鬼女伝説をもとにした「紅葉狩」(運上裕年作・演出)を。和歌山県では海南万葉の会が劇団たなべ座(和歌山・田辺市)によるミュージカル「OGURI〜小栗判官ものがたり」(東道脚本・演出)を、また11月には劇団KCM(海南市)によるミュージカル「稲むらに火を!〜濱口悟陵の生涯」(東道脚本・演出)を上演した。濱口悟陵は稲束を燃やして村人を誘導、大津波から救った郷土の偉人。神奈川県では神奈川県でも古い77年の歴史を持つ劇団こゆるぎ座(小田原市)が「唐人お吉〜日本開国悲話」(後藤翔如作、楠田正宏演出)。岡山県では岡山芸術創造劇場ハレノワを会場に日本初の孤児院を岡山に作り、児童福祉の父といわれた石井十次の生涯を岡山市民ミュージカル「慈愛と恵み 石井十次物語」(はやみ甲脚本・作詞・演出)で。出演者スタッフ合わせ190人という大所帯だった。

訃報を。劇団「弘前劇場」(青森・弘前市)の創設メンバーで劇作家・演出家の長谷川孝治氏が1月21日死去、66歳。静かな演劇の代表的作家で青森県立美術館の舞台芸術総監督もつとめた。劇団「麦」(仙台市)創立メンバー、代表の熊谷盛氏が4月10日死去、83歳。名古屋を中心に活動、「アマチン」の愛称で親しまれた「顔座」創



立メンバーで座長の天野鎮雄氏が11月5日死去、87歳。テレビ「中学生日記」やラジオ放送などでも幅広く活躍した。劇団「幻影舞台」(島根・松江市)の主宰者・清原真氏が6月死去。74歳。

70年の歴史を持つ山口県下関市の劇団海峡座(主宰者・武部忠夫)が10月の最終公演「海峡アンソロジー劇篇IV」で幕を閉じた。コロナ禍の影響と劇団員の高齢化が看板を下ろす原因だったという。一方で新しい劇団も多く出現しているが、地方に根を下ろして奮闘する劇団の軌跡を紹介。

**【1月】** 13～15日・**関西芸術座**(大阪市)がABCホールで「たこ焼きの岸本」(蓮見恭子原作、勇来佳加脚色、松本昇三演出)を、21～28日・**劇団イナダ組**(札幌)が札幌市こどもの劇場やまびこ座で「春の黙示録」(川尻恵太脚本、イナダ演出)を上演。

**【2月】** 5日・**劇団やまなみ**(山梨・笛吹市)と**劇団創作座**(甲府市)の合同公演として笛吹市コレセセンターで朗読構成劇「八月の少女たち～ヒロシマ遺された九冊の日記帳」(大野允子作、河野通方脚本・演出)、22～26日・**演劇引力広島**(広島市)がプロデュース公演としてJMSアステールプラザ多目的スタジオで「目頭を押さえた」(横山拓也作・演出)を、25、26日・**劇団いぶき**(鹿児島・知覧町)が知覧文化会館で「春は来る」(朝隈克博作・演出)を上演。

**【3月】** 10～12日・**劇団風蝕異人街**(札幌)がシアターZOOで「毛皮のマリー」(寺山修司作、こしばぎこう構成・演出)、18、19日・**劇団上野市民劇場**(三重・伊賀市)が前田教育会館蕉門ホールで創立70周年記念公演「僕のメリーゴーランド」(近石綏子作、ふくきたわかつ演出)を、18～19、25～26日・**劇団からっかぜ**(静岡・浜松市)が劇団アトリエで「夏の庭～The Friends」(湯本香樹実原作、村吉洋子脚色、平柴俊哉演出)、24日・**劇団マグダレーナ**(香川・高松市)が高松市中央図書館視聴覚ホールで菊池寛シアター第7弾「震災余譚」(菊池寛原作、大西恵演出)、24～26日・**大阪劇団協議会**(大阪市)がフェスティバル50周年記念合同公演として吹田メイシアターで「キセツノナイマチ」(山本周五郎原作、森脇京子脚色、井之上淳演出)をそれぞれ上演。

**【4月】** 14～16日・**伊藤えん魔プロデュース公演**(大阪市)がファントマ上本町スタジオで「SCARS」(伊藤えん魔作・演出)、15～16日・**劇団演集**(名古屋市)が愛知県芸文小ホールで創立75周年記念公演「太鼓たたいて笛吹いて」(井上ひさし作、土屋たかし演出)を、21～23日・**カラクリシアター**(高知市)が県立美術館ホールで「追憶のコイン」(谷山圭一郎作・演出)を、28～30日・**劇団すがお**(三重・桑名市)がななわ小劇場公演に「人を食った話」(宮本研作、石垣まさし演出)を上演。

**【5月】** 25日・**劇団らくりん座**(栃木・那須塩原市)が那須町文化センター大ホールで「玉藻の前」(広島友好作、大河内真由美演出)、26～28日・**劇団未来**(大阪市)が東大阪文化創造館で創立60周年記念公演「梅子の梅根性」(南出謙吾作、しまよしみち演出)を。

**【6月】** 16～18日・**劇団名古屋**(名古屋市)がひまわりホールで65周年記念公演「置き去りにしない～汐風の森を見つめて」(山岸千代栄作、ごとうてるよ台本、谷川伸彦演出)を、17日・**劇団名芸**(名古屋市)が天白文化小劇場で「ブレーメンの音楽隊」(広島友好作、近藤由美、拓倫司演出)、17、18日・**劇団どろ**(神戸市)が新長田小劇場で「マッチ売りの少女」(別役実作、中島英雄演出)を。

**【7月】** 14～16日・**劇団せすん**(大阪市)が大坂グリーン会館で「雨と猫といくつかの嘘」(吉田小夏作、ZERO演出)を、15、16日・**シャカカ**(高知市)が蛤蔵で「ロック」(行正正義作・演出)、15～16日・**シニアミュージカル発起座**(大阪市)がドーンセンターで「エンジェルの翼～日本女子プロ野球最後の試合」(秋山シュン太郎作・演出)を、31～8月2日・**ミュージカル劇団もえぎ色**(札幌市)がコンカリーニョでサーカス歌劇「ユメノサーカス'23」(チャゲンタ原作、深浦佑太脚色、光耀萌希演出・振付)を上演。

**【8月】** 11～13日・**劇団ドラマシアターども**(北海道・江別市)がドラマシアターどもIVで「立冬のころ」(安念智康作、ども演出)、17～20日・総合劇集団・**俳優館**(名古屋市)が千種文化小劇場でミュージカル「裸王～アンデルセン『裸の王様』より」(八代将弥脚本・演出)を。

**【9月】** 22～23日・**劇団やませ**(青森・八戸市)が八戸市公会堂文化ホールで「ひたむきに生き

て～永嶋暢子と婦人解放運動」(佐々木功作・演出)、23日・**劇団楽天夢座**(山形市)が山形市中央公民館ホールで劇団旗揚げ35周年記念公演「表に出ろいっ!」(野田秀樹作、楽天十郎演出)を上演。

【10月】8～15日・NPO法人**劇団はぐるま**(岐阜市)が御浪町ホールで「今度は愛妻家」(中谷まゆみ作、糸永しのぶ演出)、12～14日・**架空の劇団**(岩手県盛岡市)が盛岡劇場タウンホールで「スケッチブック～供養絵をめぐる物語」(ちばるりこ原作、くらもちひろゆき脚本・演出)を。14～15日・**演劇集団和歌山**(和歌山市)が県民文化会館小ホールで「嘘にまぶして浪花節」(楠本幸男作、山入桂吾演出)、27～29日・**劇団態変**(大阪市)がABCホールで40周年記念公演「私たちはアフリカからやってきた」(金満里作・演出)を。27～29日・**劇団未来**(大阪市)が劇団ワークスタジオで「パレードを待ちながら」(ジョン・マレル作、吉原豊司訳、しまよしみち演出)を、28～29日、11月18～19日・**劇団からっかぜ**(浜松市)が劇団アトリエで「もやしの唄」(小川未玲作、布施佑一郎演出)を。

【11月】10～11日・**劇団山形**(山形市)が山形市中央公民館ホールで「ら抜き殺意」(永井愛作、平野礼子演出)、11～12日・**劇団いわき小劇場**(福島・いわき市)がいわき芸術文化会交流館アリオスで「療養所」(三月広明作、松本恵美子演出)、11～12日・**劇団石**(熊本市)が健軍文化ホールで「煙が目にしみる」(堤泰之脚本、邑木みほ演出)を。11、12日・**劇団テアトル広島**(広島市)が東区民文化センターホールで「シャングリラにようこそ」(松岡励子『天国ホームの人々』より五十嵐美佐子脚色・演出)を、11～12日・**劇団オーガンス**(愛媛・内子町)が内子座で「コーネリアス～人間の本质を描く愛と死の物語」(稲月P脚本・演出)を。18～19日・**東北幻野**(山形・本庄市)が本庄市民文化会館大ホールで「くちづけ」(宅間孝行作、都市由希野演出)、18～19日・**劇団弘演**(青森・弘前市)が弘前文化センターで創立60周年記念公演「袖ふりあうも…落語『唐茄子屋政談より』」(作間しのぶ脚色・演出)、23～26日・**劇団名芸**(名古屋市)が劇団アトリエで「夕鶴」(木下順二作、しものみさえ演出)をそれぞれ上演。

【12月】2～3日・**劇団若者座**(広島・宇部市)

が多世代ふれあいセンターで「プロポーズ」(チェーホフ作、武田ちあき演出)、8～10日・**ギングラ太陽's**(福岡市)が西鉄ホールで「超時空地下街テンチカ 七隈線で別世界へGO!」(大塚ムネト脚本・演出)を。9～10日・**劇団海鳴り**(北海道・紋別市)が紋別市文化会館ホールで「山茶花さいいた」(ふたくちつよし作、いがらし陽子演出)、15～17日・**ゆざ演劇研究会**(山形・遊佐町)が遊佐町生涯学習センターホールで「蠅取り紙～山田家の5人兄妹」(飯島早苗・鈴木裕美作、本間知広演出)を上演。

もり・ようぞう

演劇ライター・演劇研究。1941年大阪生まれ、早大文学部卒。1964～2006年、中日新聞・東京新聞(放送芸能部長、編集委員)勤務。文化庁芸術祭・芸術選奨審査・選考委員、国立劇場歌舞伎公演専門委員等を歴任。日本演劇協会、芸能学会会員、松尾芸能賞選考委員

[関西の演劇]

## 2023年 「ポスト・コロナ」で新たな胎動

宮辻政夫

### 人間国宝に関西関係の4人

〈顕彰〉関西関係の4人が重要無形文化財(各個認定)いわゆる人間国宝に認定された。

まず能楽から3人。シテ方金剛流26世宗家、金剛永謹。おらかな芸風で知られる。金剛流はシテ方五流のうち、宗家が東京以外の地に居住している唯一の流派。シテ方金剛流の人間国宝認定は45年ぶりである。

ワキ方下掛宝生流13世宗家、宝生欣哉。能楽協会東京支部所属として活躍していたが、令和2年(2020)11月16日から京都支部に所属。それ以前から京都能楽養成会の講師を勤めてきて京都に縁が深い。人間国宝認定時は56歳。能楽界では最年少記録である。

狂言方大蔵流、茂山七五三。四世茂山千作の次男で五世千作の弟。大学卒業後、京都の金融機関に18年間勤めながら狂言方としても活躍。9月、三老曲の一つ『庵梅』を披き、老尼の一抹の寂しきなど味わい深い舞台だった。茂山家独自の型も見せた。

人形浄瑠璃・文楽からは人形遣い、二代目吉田玉男。大阪府八尾市出身。15歳で初代玉男に入門。立役の人形遣いで、初代の得意とした多くの役を継承。どっしりと存在感ある遣いぶりが特徴だ。

### 大槻能楽堂の企画、好評

〈能楽〉大阪の能楽界はシテ方観世流、大槻文蔵の本拠地、大槻能楽堂が中心となって活発な活動を続けている。令和元年(2019)から始まったリニューアル工事は文化庁の助成や多くの市民の協力を得て90%まで終了。座席が広くなるなど好評である。

令和5年(2023)の自主公演能では「能の魅力を探るシリーズ」として第一線の能楽研究者と文蔵が対談する「大槻文蔵と読み解く 能の世界」を開催。対談相手は天野文雄・大阪大学名誉教授、村上湛・明星大学教授、松岡心平・東京大学教授、山中玲子・法政大学能楽研究所教

授ら。前年から開催され、文蔵の考えをナマで聞ける貴重な機会である。12月16日は「謡の変化・音楽の変化」と題して東京文化財研究所名誉研究員の高桑いづみと対談。高桑が謡の一節を謡ってわかりやすく解説した。

同日、『松風(戯之舞)』(シテ・片山九郎右衛門、ツレ・大槻裕一)が上演された。九郎右衛門が前半、汐波みの場面など豊かな風情で堪能させた。後半の狂乱は対照的に激しくキレのある動きを見せて盛り上がった。

2月23日に上演された『玄家(替之型、早装束、兎)』は、シテが観世流26世宗家、観世清和。ツレは観世三郎太という父子共演。前シテは老翁。後シテは村上天皇の霊で、竜神に琵琶の名器「獅子丸」を持って来させ、琵琶の名手、藤原師長(三郎太)に与える。父子の芸の伝承と重なって見え、清和の風格ある芸、三郎太の爽やかさが生きた。

7月14日のろうそく能は華道池坊流の次期家元、池坊専好の立花でシテ方喜多流宗家預かり、友枝昭世の『半薔(立花)』。11月25日の『鯉丸(替之型、琵琶之応答)』(シテ、観世喜正、梅若紀彰)も話題の舞台だった。

大槻能楽堂主催として10月14、15日、四天王寺中心伽藍で「スペクタクル新能in四天王寺」を開催。聖徳太子がシテの新作能『桐葵』(井沢元彦原作)、半能『石橋』、半能『土蜘蛛』を上演。14日は雨天中止となったが、五重塔が聳える美しい空間を生かした公演だった。

大槻秀夫33回忌追善として「大槻文蔵 裕一の会」(11月12日、大槻能楽堂)を開催。文蔵の芸養子、裕一が『道成寺』を披いた。ダイナミックな鐘入りを見せ、若き溢れる『道成寺』であった。裕一は大阪市の令和5年度「咲くやこの花賞」を受賞した。この会で文蔵は舞囃子「安宅(延年之舞)」を舞った。見事な舞で能を見ているのと同様、あるいはそれ以上の感動があった。

大槻文蔵の能としては「野口傳之輔卒寿記念能と囃子の会」(9月18日、大槻能楽堂)での『檜

垣』を挙げておこう。4回目の『檜垣』である。今回は蘭拍子ではなく序ノ舞を舞う。話、佇まい、動きなど隙のない舞台。釣瓶のかけ縄を引く形などきっかりと古風で美しく、白拍子の霊の舞は、内側から側々と湧き上がってくるものがあり、人生を感じさせた。

京都観世会(片山九郎衛門会長)は、第7回復曲試演の会で『粉河祇王』を上演した。この会は京都観世会が世阿弥生誕650年に合わせて平成22年(2010)に復曲チームを発足させ、2年後に『阿古屋松』(シテ、片山幽雪)を上演したのが始まり。以後も2年がかりで台本作成、節付、型付などを行って上演、というスケジュールである。西野春雄・法政大学名誉教授監修。

粉河で争いが起こり、若者が牢に入れられるが、番人(シテツレ、浦田保親)は不憫に思い逃がしてやる。この番人が祇王(シテ、青木道喜)の父。祇王は平清盛の寵愛を受けた白拍子である。父が処刑される日、祇王と二人で観音に祈ると、振り下ろされる刀が真っ二つに折れ父は許される。父娘の情、奇瑞の面白さなど充実した仕上がりだった。

### 顔見世は13代目市川團十郎白猿襲名披露に沸く

〈歌舞伎〉12月、京都・南座の「當辰歳吉例顔見世興行」は市川海老蔵改め十三代目市川團十郎白猿襲名披露、八代目市川新之助初舞台である。昼の部は『双蝶々曲輪日記』『相撲場』の後、『外郎売』。八代目市川新之助の外郎売実は曾我五郎である。難しい外郎売の言い立てを新之助が見事な喋りで聞かせた。緩急強弱、イキの変化など10歳とは思えないくらい躍動していた。工藤は梅玉。『男伊達花廊』は十三代目團十郎が御所五郎蔵に扮して登場。見るからに粋な男伊達である。四代目市川ぼたんが禿たよりとなって『羽根の禿』を愛らしく踊った。『景清』は團十郎の景清。平成26年(2014)正月、新橋演舞場で初演された『壽三升景清』のうちの一幕。『壽三升景清』は、歌舞伎十八番のうち『関羽』『鎌髭』『景清』『解脱』の四作品を一つにまとめたもの。今回はその『景清』部分である。牢に囚われた景清に会いに、阿古屋(雀右衛門)と一子人丸(村岡花瑛、戸谷文香)がやってくる。畠山重忠(梅玉)が寸志として牢の鎖を解き、景清が牢破り。大力を発揮して荒事の立回りを見せた。津

軽三味線を用いたのが新しい試みである。

夜の部は『仮名手本忠臣蔵』『祇園一方茶屋の場』から。仁左衛門の由良之助である。祇園の茶屋で遊興する色気、敵討ちの話をはぐらかしていく面白さ、時に敵討ちの志が目に宿る時の鋭さ、さらにそれらを包み込んでいく器の大きさ、など仁左衛門ならではの。終盤、九太夫を折檻し、仇討ちを目指している塩冶浪人の苦勞などを語る場面は、畳み込んでいく台詞の面白さだけではなく、せりふ一つ一つの意味内容を丁寧に表現。聞き物であった。他に仁左衛門独自のやり方も見せて充実した由良之助だった。平右衛門の芝翫、おかるの孝太郎も好演。

襲名披露口上では、十三代目團十郎がニラミを披露、喝采を浴びた。

『助六由縁江戸桜』は團十郎の助六実は曾我五郎。揚巻と白玉を壱太郎と児太郎が日替わりで勤め、髭の意休実は伊賀平内左衛門は男女蔵という新鮮な配役である(観劇日は壱太郎の揚巻)。

團十郎は、明るく爽快な男ぶり。出端は様々に傘を扱っての形も極まり、動きも滑らか。おらかな風格がある。武士の意休に楯突く台詞もイキがいい。壱太郎の揚巻は酔態の出など大きさと華やかさがある。台詞に力があり堂々たる揚巻である。悪態の初音も充分聞かせた。助六が、くわんべら門兵衛(芝翫)、朝顔仙平(歌昇)をやりこめた後、白酒売実は兄の曾我十郎(扇雀)が登場。柔らかみある和事の役。通人里暁は鷹治郎。股ぐりではラルフローレンの香水を使うなど笑いを誘った。

### 好企画、東西の『忠臣蔵』五、六段目競演

関西のその他の歌舞伎公演をまず南座から月順に見ていこう。

三月花形歌舞伎は『忠臣蔵』五、六段目と『忠臣いろは絵姿』(松岡亮脚本)。五、六段目はAプロとBプロのダブルキャスト。Aプロは勘平(壱太郎、おかる(千之助)、弥五郎(蒼玉)、定九郎(鷹之資)、おオ(尾上右近)。Bプロは勘平(尾上右近)、おかる(蒼玉)、弥五郎(鷹之資)、定九郎(吉之丞)、おオ(壱太郎)。つまり、Aプロは壱太郎が中心となって上方型(團蔵型)、Bプロは右近が中心となって江戸型(音羽屋型)で見せるという好企画である。壱太郎の勘平は五段目

幕開き、顔を隠している笠を下に降ろしてみせた(それから笠を上げた)。ここは上方型で演じて、音羽屋型と同じように笠を上へ上げて顔を見せる役者が殆どである。それだけに研究の跡が窺えた。当然ながら花道では鉄砲を撃たず、構えて極まる。おかるとの別れ、自分が与市兵衛を殺したのではないかと秘かに悩乱するあたりなど上々。後ろ向きで腹を切るなども周到だった。

右近もしっかりした勘平であった。浅葱色の紋服の紋を見て礼をするなどきちんと見せ、お才の着物の縞と財布の縞を見比べる場面ははじめ巧者である。Aプロ、Bプロとも解説を付けた。

5月は「歌舞伎鑑賞教室」。今年は『妹背山婦女庭訓』の「願絲縁芋環」。『妹背山』の道行を長唄や義太夫でなく常磐津で見せた。お三輪(吉太郎)、橘姫(りき彌)、求女実<sup>ねむね</sup>は藤原淡海(千次郎)。吉太郎は踊りも演技もしっかりしており、これからの上方歌舞伎を支える役者の一人であることを示した。上演前に「歌舞伎の講釈」と題して旭堂南龍の解説があった。

歌舞伎と銘打っていないが、八月は坂東玉三郎特別公演『怪談 牡丹灯笼』(大西信行脚本、玉三郎演出)。玉三郎のお峰、愛之助初役の伴蔵である。新派から喜多村緑郎、河合雪之丞が参加した。

お露(玉朗)は乳母お米(吉弥)とともに幽霊となつて、恋しい新三郎(緑郎)の許へ通つてくる。しかし新三郎が貼ったお札のため家へ入れない。伴蔵は、札をはがして欲しいとお米から頼まれる。吉弥が幽霊の感じをうまく出し、台詞の巧みさも光った。幽霊の話に伴蔵から聞き、お峰が「怖い」などと怖がる。このあたり玉三郎が笑わせる芝居をさらりと見せて、面白い。他の場面でも、少し茶目つ気のある玉三郎の演技が楽しめた。札をはがした札に百両をもらい、二人は荒物屋を開く。

商家の主人となつた伴蔵。貫禄を見せ、前半の伴蔵との違いを愛之助が演じ分けた。玉三郎のお峰も前半と変わって商家の女将風。料理屋のお国(雪之丞)といい仲になっている伴蔵を、お峰が言葉でじわじわと締め上げていく場面は玉三郎が嫉妬の怖さを表現した。

ラストの殺しの場は通常、雨の土手であるが今回は店の中の立回りに変えた。

九月花形歌舞伎は三代猿之助四十八撰の内『新・水滸伝』(横内謙介作・演出、杉原邦生演出、市川猿翁スーパーバイザー<sup>りんごろう</sup>)。林冲(隼人)の宙乗りに沸いた。

### 仁左衛門、5年ぶりの『俊寛』

大阪松竹座では七月大歌舞伎が上演された。関西・歌舞伎を愛する会第31回公演。

昼の部は『吉例寿曾我』から。近江(隼人)と八幡(虎之介)が立回りをする通称「曾我の石段」と、「対面」にあたる「大磯曲輪外の場」とを上演する内容。工藤は彌十郎。五郎は染五郎、十郎は千之助。『京鹿子娘道成寺』は菊之助。見事な踊りであった。急ノ舞はカットせず踊り「鐘に恨みは」では、露わにくだげず上品。このあたり菊之助の魅力でもある。「言わず語らぬ」以下も品ある踊り。「都育ちは…」で引き抜き。色気があり極まった。毬突きは軽快。廓尽くしは袂の扱いなど巧みで目に色気がある。「恋の手習い」は、しつとりと。鞆鼓の踊りはバチ捌き、足拍子と快い。「ただ頼め」もカットせず町娘を描き出し、鈴太鼓の踊りに。鐘入りまで飽かせなかった。

『沼津』は鷹治郎の平作、扇雀の十兵衛。掛け合いながら客席をまわっていくあたり、イキが合っていた。鷹治郎は父の情が濃く、扇雀は藤十郎を思わせる和事風の演技。孝太郎のお米は元遊女の弄囲気など巧みに出した。

夜の部は『俊寛』から。仁左衛門の俊寛。流人の成経(幸四郎)、が海女の千鳥(千之助)と祝言をあげる。赦免船が来て成経、康頼(橘三郎)は許されるが、俊寛は許されない。赦免使の瀬尾(彌十郎)に「ただし筆者の誤りか」と強く言ってみつめる。ここから瞬きせずに瀬尾を見つめ「清盛公の厳命だ」と聞き、初めて目を閉じる。計算された心情表現で緊迫感を高めた。花道スッポンへ体を沈め波布が胸まで迫ってくる演出を見せるのは今、仁左衛門だけである。幕切れは静かな笑みを浮かべる。これも仁左衛門のやり方である。

『吉原狐』(村上元三作、齋藤雅文補綴・演出)は17年ぶりの上演。芸者屋を営む三五郎(幸四郎)は、仲働きのお杉(虎之介)を後添えに望んでいる。娘で人気芸者のおきち(米吉)はお尋ね者の貝塚采女(染五郎)に惚れてしまう。幸四郎

が父の情と厳しさを表現。すっきりした喜劇に仕上がった。

9月は愛之助が座頭を勤める永楽館歌舞伎が兵庫県豊岡市で4年ぶりに開催された。愛之助が梅王を演じる上方型の『車引』、口上と続き『釣女』は愛之助の太郎冠者。連日満員だった。

8月には第8回あべの歌舞伎「晴の会」が大坂・近鉄アート館で開催された。上方歌舞伎塾第1期生の片岡松十郎、片岡千壽、片岡千次郎らが中心となって平成27年から始まった、門閥外の歌舞伎俳優による公演だ。第8回は『肥後の駒下駄』（勝彦蔵原作、亀屋東斎改訂、片岡仁左衛門監修、山村友五郎演出）。67年ぶりに第5回で上演した、その再演。熱い力が結集した。

### 大阪松竹座、開場100周年で賑わう

大阪松竹座は大正12年(1923)5月18日、大阪で初めての鉄筋コンクリート造りで椅子席という洋式劇場としてオープンした。ネオ・ルネッサンス様式のファサード(外壁)ははじめ古典とモダニズムを融合させた劇場建築で、外壁は今なお正面に残って当時の息吹を伝えている。当初の大阪松竹座は、映画と実演の劇場であった。

2023年の1年間、開場100周年記念公演として賑わった。1月は坂東玉三郎×鼓童初春特別公演『幽玄』。大阪松竹座が玉三郎公演で正月を迎えるのは3年連続。『羽衣』で玉三郎が天女の舞を見せ、花柳壽楽が花柳流の若手二人と『石橋』を踊った。最後は玉三郎の白拍子花子で『道成寺』。これは太鼓奏者と玉三郎がからむなど新趣向。

5月は「道頓堀松竹座映画祭」。キートンの無声映画(活弁付)、世界的名作『東京物語』(小津安二郎監督、一世を風靡した『君の名は』(第1部))、『風と共に去りぬ』など計22作品が上映された。6月は五関晃一、戸塚翔太らが出演する『夜曲〜ノクターン〜』(横内謙介脚本、中屋敷法仁演出)。10月は高木雄也、中山優馬、高地優吾ら出演の『星降る夜に出掛けよう』(坂東玉三郎演出・翻案・脚本・作詞)。12月は浜中文一、室龍太、綺咲愛理らが出演する『わか町 道頓堀』(わかぎるふ原作、G2演出)で掉尾を飾った。

### 文楽は『妹背山』の通しに人気

〈文楽〉国立文楽劇場の1月は第1部『良弁杉由

来』で「二月堂」は千歳太夫、富助。良弁は玉男が風格ある遣いぶりを見せ、渚の方は和生。品格と哀れさがある。第2部『義経千本桜』は「椎の木」から「すしや」まで。「すしや」前半は呂勢太夫、清治。後半は呂太夫、清介。清介が好演奏。権太は玉助。第3部は『傾城恋飛脚』新口村と『檀浦兜軍記』阿古屋琴責。呂勢太夫、織太夫、藤蔵ら。阿古屋は勘十郎が華麗に遣った。

4月は第1部が『妹背山婦女庭訓』の初段と二段目。「芝六忠義」は千歳太夫、富助。第2部は三段目で「太宰館」と「妹山背山」である。背山は呂太夫、織太夫、藤蔵、清介。妹山は鍛太夫、呂勢太夫、清治、宗助。人形は玉男の大判事、玉佳の久我之助、和生の定香、一輔の雛鳥。第3部は近松門左衛門300回忌にちなみ『曾根崎心中』。「天満屋」は呂勢太夫、清友。勘十郎のお初に玉助の徳兵衛が胸を借りて健闘した。

『妹背山』通しは7~8月の夏休み公演にも続き、第2部で四段目「井戸替」から「入鹿誅伐」まで上演した。

11月は第1部『双蝶々曲輪日記』。第2部は『奥州安達原』。「袖萩祭文」は呂勢太夫、清治。呂勢太夫は美声で知られるが、低い語り出しも充分。袖萩は和生。桂中納言則氏実は安倍貞任は玉男。第3部は『冥途の飛脚』。千歳太夫、富助ら。勘十郎の忠兵衛、勘彌の梅川が好演。

10月、大阪市主催の「中之島文楽」では講談とプロジェクションマッピングがコラボし、好評であった。

### 藤山直美が奮闘。松竹新喜劇は若手5人の新体制に

〈商業演劇〉10月、南座の錦秋喜劇特別公演は藤山直美が出演。『大阪ざらい物語』で船場の老舗の娘、千代子を演じた。手代との結婚が許されないと、車引きになる、と言い出す。直美の代表作の一つ。後半は直美の一人舞台と言ってもいいほど次々にギャグを連発。客席から笑いが弾ける。喜劇に徹する直美の姿勢が凄まじい。歌舞伎界から鷹治郎、扇雀が参加。『祇園小唄』で花を添えた。

松竹新喜劇は1月、南座で『裏町の友情』『流れ星ひとつ』を上演。5月、大阪松竹座では劇団創立75周年の記念公演を開催。この公演で二代

目渋谷天外は代表を退き、若手5人による新体制となった。5人は藤山扇治郎、渋谷天笑、曾我廼家一蝶、曾我廼家いろは、曾我廼家桃太郎。『花ざくろ』(齋藤雅文演出)は、植木職人の三次郎(扇治郎)と、外泊して遊びまわる妻加代子(いろは)の情愛を描く。初演から三次郎を演じていた藤山寛美は、出てきた時から植木のことしか知らない職人の感じを出していた。妻加代子役は5人の女優を見てきたが、何と言っても曾我廼家鶴蝶にとどめを刺す。前半の亭主を馬鹿にした態度、後半の可愛さなど忘れ難い。そんな名作に二人とも初役で挑み新鮮な演技を見せた。齋藤演出も二人の若さを生かし効果を挙げた。『三味線に惚れたはなし』(川浪ナミヲ演出)は時代劇バージョンで見せた。また扇治郎は4月、南座で『若き日の親鸞』(五木寛之原作、森脇京子脚本、齋藤雅文演出)に出演。親鸞を演じた。

### 関西俳優協議会最優秀新人賞など決定

〈現代演劇〉「KYOTO EXPERIMENT 2023 京都国際舞台芸術祭」が9、10月、京都市内で開催された。2010年から始まり実験的な舞台芸術表現と社会をつなぐのが目的。ウィチャヤ・アータマート／For What Theatre『ジャグル&ハイド(演出家を探すんだかわからない7つのモノたち)』など多くの斬新な作品が目玉を集めた。

第51回大阪劇団協議会フェスティバルは9月から12月にかけて開催され9劇団が参加。作品賞に人形劇団クラルテ『女殺油地獄』と劇団未来『パレードを待ちながら』が選出された。男優演技賞には宇仁菅真(劇団五期会)、女優演技賞には内戸恵美(劇団未来)。また永年の功績として特別賞が藤山喜子(関西芸術座、12月22日死去)と高木真理子(劇団しし座)に贈られた。

関西俳優協議会は2023年度新人育成事業として最優秀新人賞を決定。『The Scottish Play』のロス役、山根翔大(劇団五期会)と『ねこはしる』の魚役、未花子(関西芸術座)の清新な演技が評価され、二人が選出された。

劇団しし座代表の北川隆一は大阪府知事表彰を受けた。第3回大阪演劇見本市が大阪・ナレッジ・シアターで開催された。Aプロは旭堂小南陵の講談(講釈)と演劇のコラボ(「釈芝居」

という)で『赤垣源蔵・徳利の別れ』(井之上淳演出)。Bプロは春野恵子の浪曲(浪花節)と演劇のコラボ(「節劇」という)で『樽屋おせん』(尾崎磨基演出)。なかなか面白く盛況だった。

兵庫県立ピッコロ劇団は2月、プレヒトの『三文オペラ』(松本修台本・演出)を全編大阪弁で上演。違和感なく楽しめた。ピーチャムは孫高宏、ピーチャム夫人は木下菜穂子。7月は『やわらかい服を着て』(永井愛作、眞山直則演出)。9月は劇団代表、岩松了が32年前に発表した『スターマン』(岩松演出)の再演。並べて吊るされたワイングラスが、隣室の夫婦の肉体による振動で揺れて音を立てる。しかし隣室の妻が不在なのにワイングラスが揺れて音をたてた。つまり夫が妻以外の女性の肉体と振動させている——。鳴り続けるワイングラスを目の前にして妹(有川理沙)が怯えるラストシーンが傑出している。

3つの劇場空間はじめ10のスペースを持つシアター・コンプレックス扇町ミュージアムキューブが10月に開場。オープニング公演のトップは南河内万歳一座『まさか様のお告げ』(内藤裕敬作・演出)。劇団が健在ぶりを示した。

### 柚香光のショーにどよめく

〈宝塚歌劇、OSK〉宝塚歌劇団の劇団員が9月に亡くなった問題の影響で、公演数など見直しが進められている。花組トップの柚香光は2024年5月、東京公演の千秋楽をもって星風まどかと同時退団する。その柚香のコンサート形式のショー『BE SHINING!!』(藤井大介作・演出)が12月、神戸国際会館こくさいホールで上演された。2000人以上を収容するホールは満員。柚香が歌、ダンス、トークに魅力を振りまくと、会場にはどよめきと熱気が渦巻いた。冒頭のダンスは柚香自身の初振付。しなやかな四肢の動きの美しさを生かしていた。『エリザベート』『ロミオとジュリエット』などの世界を歌、ダンスで現出させ、力量を存分に発揮した。一方、宝塚バウホールでは10月の星組公演『My Last Joke——虚構に生きる——』(竹田悠一郎作・演出)ははじめ5作品が他劇場では見られない公演で、若手らが実力を競い、手応えを感じさせた。

OSK日本歌劇団は2月、大阪松竹座で『レビュー 春の踊り』(上島雪夫作・演出・振

付)、11月には南座で『REVUE in Kyoto～Go to the future～京都から未来へ!～』(同)を公演。トップスターの楊琳らが華麗なレビューを展開した。戦前、OSKの人気スターで戦後も歌手として活躍した笠置シズ子をモデルにしたNHK連続テレビ小説『ブギウギ』が10月から放映され、現役劇団員の翼和希がオーディションを受けて出演。観客増につながった。

**〈劇団四季〉** 7月14日に創立70周年を迎えた劇団四季。関西の拠点、大阪四季劇場では5月27日、『オペラ座の怪人』が日本上演8000回を達成。初演から35年。当日のカーテンコールではラウル役の岸佳宏が感謝を述べ、8月27日、惜しまれながら千秋楽を迎えた。

みやつじ・まさお

演劇評論家。元毎日新聞大阪本社学芸部専門編集委員。著書に「花のひと——孝夫から仁左衛門へ」「人形有情——吉田玉男文楽芸談聞き書き」「狂言兄弟——千作と千之丞の八十七年」「無辺光——片山幽雪聞書」など。



[テレビ・ドラマ]

## 2023年のテレビドラマ ～オリジナル脚本の秀作が輝いた1年 中町綾子

テレビドラマでは多様な価値観、多様な生き方を認める作品に新たな表現への挑戦がみられ、注目を集めた。自分とは異なる境遇、異なる生き方の他者を認め、同時にほかの人とは異なる自分の価値観や人生を受け入れる。そんなふうに入びとの生き方を肯定するドラマが強い存在感を放った。

映像コンテンツとしてのテレビドラマの存在感が増した1年でもあった。民放テレビ局の連続ドラマのラインナップでは原作(小説・漫画等)をベースとしない大胆なオリジナル企画が目をつけた。1月にスタートした**日曜ドラマ『ブラッシュアップライフ』**(日本テレビ)、4月にスタートした**日曜劇場『ラストマン—全盲の捜査官—』**(TBS)、夏に大きな話題となった**日曜劇場『VIVANT』**(TBS)、3月～4月にWOWOWで放送された**連続ドラマW『フェンス』**は、いずれもオリジナル脚本のドラマだった。

一方で、漫画原作のドラマにも秀作があった。**ドラマ10『大奥』**(NHK)、**日曜ドラマ『セクシー田中さん』**(日本テレビ)、**ドラマ24『きのう何食べた? Season2』**(テレビ東京)で、いずれも、そのメッセージ、空気感、俳優の魅力などに新鮮さがあった。また、深夜の時間帯を中心として、数多くの漫画原作の恋愛ドラマが放送された。

テレビドラマが新たな切り口で投げかけたメッセージを中心に1年を振り返る。

### ●連続ドラマの注目作

**日曜ドラマ『ブラッシュアップライフ』**(日本テレビ、1月8日～3月12日、全10話)は、エンターテインメント性の高さ、細やかな日常描写、確かな時代感覚、ストレートなメッセージが際立つ秀作だった。主人公の近藤麻美(安藤サクラ)は、地元の市役所で働き、幼なじみとのご飯やカラオケを楽しみに日々を送っていた。そんな彼女が交通事故で命を落とし、死後の世界の案内人(バカリズム)に来世、何に生まれ変わる

かを告げられる。そこで、彼女は徳を積んで来世も人間に生まれ変わりたい、ともう一度、近藤麻美としての人生をやり直す選択をする。徳を積むために奮闘する姿がコミカルで楽しい。一方で、平凡な人生のなかで何を思い、何を大切にしているかといった感覚にはリアリティがあり、タイムリプするという大胆な展開ながら、日常的な共感を呼ぶドラマだった。ごく身近なできごとや友情を大事にする生き方が心地よく描き出された。(脚本＝バカリズム、演出＝水野格、狩山俊輔、松田健斗、チーフプロデューサー＝三上絵里子、プロデューサー＝小田玲奈ほか、東京ドラマアウォード2023長編ドラマ部門最優秀賞／脚本賞＝バカリズム、ギャラクシー賞3月度テレビ部門月間賞、第49回放送文化基金賞テレビドラマ部門奨励賞、第39回ATP賞テレビグランプリ総務大臣賞／優秀賞、2023年日本民間放送連盟賞番組部門テレビドラマ種目優秀賞、Content Innovation Awards 2023 Best New Scripted Series Non-English Language、アジア・テレビジョン・アワード 2023[ATA2023]最優秀脚本賞ほか受賞)

**『星降る夜に』**(テレビ朝日、1月17日～3月14日、全9話)は、海街で働く産婦人科医の雪宮鈴(吉高由里子)と、10歳年下で音のない世界で生きる遺品整理士の柊一星(北村匠海)の恋愛を軸に、出産で妻を亡くした45歳の新米医師の佐々木深夜(ディーン・フジオカ)、医療裁判から鈴を逆恨みし続ける被害者遺族の伴宗一郎(ムロツヨシ)に傷を負った人たちがゆっくりと救われていくヒューマンドラマだった。人と人との関係の中にある癒しを丁寧に描くオリジナルドラマだった。(脚本＝大石静、ゼネラルプロデューサー＝服部宣之、プロデューサー＝貴島彩理ほか、監督＝深川栄洋、山本大輔、東京ドラマアウォード2023長編ドラマ部門優秀賞)

そのほか、1月期のドラマにはオリジナル脚本の恋愛サスペンスドラマ・**金曜ドラマ『100**

万回言えばよかった』(TBS、1月13～3月17日、全10話、出演＝井上真央、佐藤健、脚本＝安達奈緒子、演出＝金子文紀、山室大輔ほか)、**ドラマ10『大奥』**(1月10日～3月14日、全10話、出演＝中島裕翔、富永愛、福士蒼汰、堀田真由、仲里依紗、山本耕史、スタッフは、10月スタートのSeason2の項を参照。ギャラクシー賞3月度テレビ部門月間賞)などがある。

4月にスタートした**日曜劇場『ラストマン 全盲の捜査官』**(TBS、4月23日～6月25日、全10話)は、FBI(アメリカ連邦捜査局)から交換留学で日本に来た盲目の捜査官・皆実広見(福山雅治)とアテンド役の警視庁警部補・護道心太郎(大泉洋)のバディものだ。皆見は幼い頃に視力を失い、事件の分析力、的確な判断力を並々ならぬ努力で培った。そんな彼が、護道はじめ周囲の協力を得て事件を鮮やかに解決する。その姿が爽快に描かれた。親子をめぐる物語や、仲間と力を合わせての職務の遂行など、日曜劇場らしいテーマを骨太のサスペンスエンターテイメントとして見せた。(脚本＝黒岩勉、演出＝土井裕泰、平野俊一、石井康晴ほか、プロデューサー＝益田千愛ほか)

**金曜ナイトドラマ『波よ聞いてくれ』**(テレビ朝日、4月21日～6月9日、全8話)は、スープカレー屋のアルバイト店員だった鼓田ミナレ(小芝風花)がローカルラジオ局のパーソナリティとして奮闘する姿をパワフルに描いた。架空実況やオーディオドラマ、隣人を突撃訪問しての収録、構成作家の取材旅行に同行してのレポート録音など、彼女が番組を作る姿にラジオの魅力が伝えられた。第4話では、構成作家の久連木(小市慢太郎)が、ワークショップで「放送事業としてラジオがテレビに勝っていることが4つだけある」として、地域密着性、災害への対応力、反応の早さに続いて最後に、自由を挙げる。作家が思いついた企画、パーソナリティとの雑談で浮かんだアイデアが、次の放送で実現できる。成功か失敗かもリスナーの反応ですぐわかる、まだるこしさのない怖い世界、と説くなどラジオ論が語られた。(脚本＝古家和尚、演出＝住田崇、片山修、植田尚、原作＝沙村広明、プロデューサー＝高崎壮太、神通勉、ギャラクシー賞6月度テレビ部門月間賞)

**連続ドラマW『フェンス』**(WOWOW、3月19

日～4月16日、全5話)は、本土復帰50年を迎えた沖縄を舞台にしたオリジナル脚本の連続ドラマだ。雑誌ライターの小松綺絵(松岡茉優)は、米兵から性的暴行被害を受けたと訴える大嶺桜(宮本エリアナ)を取材するために東京から沖縄に向かう。真相が明らかになる過程に、沖縄の現在が描かれていく。沖縄と本土、日本とアメリカ、人種、ジェンダーといった問題にある“フェンス”について考えさせるドラマだった。(脚本＝野木亜紀子、監督＝松本佳奈、プロデューサー＝高江洲義貴、北野拓、東京ドラマアウォード2023長編ドラマ部門優秀賞、ギャラクシー賞4月度テレビ部門月間賞、モンテカルロ・テレビ祭 ゴールデンニフ賞(最高賞)ノミネート、MIPCOM BUYERS' AWARD for Japanese Drama 2023奨励賞)

3月と5月にスタートの**BSプレミアム**にも注目作があった。**プレミアムドラマ『グレースの履歴』**(NHK BSプレミアム、3月19日～5月7日、全8話)は、夫(滝藤賢一)が、亡き妻(尾野真千子)の愛車“グレース”のカーナビの履歴をもとに車を走らせ、そこで出会う人たちを通して彼女が残した愛のメッセージを受け取る。ロードムービースタイルで抒情性の豊かなドラマだった。(脚本・演出・原作＝源孝志、制作統括＝樋口俊一ほか、ギャラクシー賞7月度テレビ部門月間賞)。**プレミアムドラマ『家族だから愛したんじゃない、愛したのが家族だった』**(NHK BSプレミアム、5月14日～7月16日、全10話)は、高校生の長女(河合優実)の目線で10年以上にわたる家族の物語を紡ぐものだった。第1話で語られるのは、「家族の死、障害、不治の病。どれか一つでもあればどこぞの映画監督が世界を泣かせてくれそうなモノ。それ全部、うちの家に起きてますけど?」というセリフだ。たくましく、明るく生きる主人公とその家族の愛のかたちが描かれた。(そのほかの出演＝坂井真紀、吉田葵、錦戸亮、美保純、脚本＝市之瀬浩子、大九明子ほか、演出＝大九明子、原作＝岸田奈美、制作統括＝坂部康二ほか、ギャラクシー賞7月度テレビ部門月間賞、第49回放送文化基金賞 テレビドラマ部門優秀賞)

そのほかの4月スタートのドラマには、実在のお笑い芸人の半生を描く**日曜ドラマ『だが、情熱はある』**(日本テレビ、4月9日～6月25日、

全12話)があった。オードリーの若林正恭を高橋海人(King & Prince)、南海キャンディーズの山里亮太を森本慎太郎(SixTONES)が熱演した。(脚本=今井太郎、演出=狩山俊輔ほか、プロデューサー=河野英裕ほか)。

7月スタートの**日曜劇場『VIVANT』**(TBS、7月16日～9月17日、全10話)は、自衛隊の秘密組織「別班」の所属員・乃木憂助(堺雅人)が生き別れた父を探すアドベンチャーストーリー(冒険物語)だ。商社での誤送金事件に端を発して、父(役所広司)と息子の物語が動き出す。第1話で乃木は誤送金された9万ドルを回収すべく現地・中央アジアのバルカ共和国に向かう。乃木の日本への決死の逃走劇はモンゴルの砂漠で撮影された。異色のロケーション撮影、ダイナミックに展開するオリジナルストーリーで、視聴者の期待をかきたてた。(そのほかの出演=阿部寛、二階堂ふみ、二宮和也、富栄ドラム、脚本=八津弘幸、李正美ほか、演出=福澤克雄、宮崎陽平、加藤亜季子、原作=福澤克雄、MIPCOM BUYERS' AWARD for Japanese Drama 2023 グランプリ)

**日曜ドラマ『セクシー田中さん』**(日本テレビ、10月22日～12月24日、全10話)は、会社の先輩同僚への憧れを軸に、ささやかだけど豊かな毎日を生きることの大切さを伝えるドラマだった。経理部の田中京子(木南晴夏)は、会社では地味な存在だが、ベリーダンサーとしてステージに上がればセクシーな魅力を放つ。派遣社員の倉橋朱里(生見愛瑠)は京子の姿に魅せられ、友情を育んでいく。京子もまた、朱里が日常のちょっと嬉しいことを語りながら「ひとつひとつは些細だけど、たくさん集めると生きる理由になる」(第8話)という実直な言葉に励まされる。真面目に日々を生きる登場人物たちの姿が愛しいドラマだった。(そのほかの出演=毎熊克哉、前田公輝、脚本=相沢友子[第1～8話]、芦原妃名子[第9・10話]、演出=猪股隆一、伊藤彰記ほか、原作=芦原妃名子、プロデューサー=大井章生ほか)

**ドラマ10『大奥』**(Season2=10月3日～12月12日、全11話)は、よしながふみの漫画を原作とするSF時代劇だ。江戸時代、若い男だけに感染する流行り病で男の数は激減し、幕府の將軍職は女性が引き継ぐ。大胆な設定で、医療の発

展や歴史の変化(幕末)を描いた。登場人物の多くは、自身のなすべきことを見極めて志を貫く。そして次代を生きる者がその志を受け継ぐ。その人物がいたからこそ先に続く歴史(未来)があるという大きなメッセージが紡がれた。男女の別をこえて未来を切り開くというメッセージが力強く響くドラマだった。出演者の好演が多く、大きな話題となった。(出演=【医療編】鈴木杏、玉置玲央、村雨辰剛【幕末編】古川雄大、愛希れいか、瀧内公美、岸井ゆきの、志田彩良、福士蒼汰、脚本=森下佳子、演出=大原拓、川野秀昭、田島彰洋(シーズン1)、末永創(シーズン2)、木村隆文(シーズン2)、制作統括=藤並英樹、長谷知記(シーズン2)、原作=よしながふみ、プロデューサー=船田遼介、松田恭典)

**『きのう何食べた? Season2』**(テレビ東京、10月7日～12月23日、全12話)も、テレビドラマの続編らしい魅力を放った。2019年のSeason1の放送から4年の歳月が流れた。パートナーである筈史朗(西島秀俊)と矢吹賢二(内野聖陽)の関係には信頼度が増し、一方で相手を思うがゆえに先々のことに考えをめぐらせもする。主人公の関係性や年齢に寄り添ったエピソードに時間感覚が反映され、多くを考えさせるドラマになっていた。(脚本=安達奈緒子、演出=中江和仁、松本佳奈、平田大輔、原作=よしながふみ、プロデューサー=阿部真士ほか)

## ●年間を通じた話題作

**大河ドラマ『どうする家康』**(NHK、1月8日～12月17日、全48話)は、徳川家康(松本潤)の生涯を、豊臣家を滅亡に追い込むまでを中心に描く。ストーリーの構築には歴史研究の新たな見解の反映がなされ、家臣団や周辺の女性との関係から新たな家康像を描き出した。撮影では、全面的にインカメラVFXを使ったバーチャルプロダクションが用いられた。(脚本=古沢良太、演出統括=加藤拓、演出=村橋直樹、川上剛、小野見知、時代考証=小和田哲男、平山優、柴裕之、制作統括=磯智明、村山峻平)

**連続テレビ小説『らんまん』**(NHK、4月3日～9月29日、全130話)は、明治から昭和にかけて日本の植物学の体系化に寄与した高知県出身の植物学者・牧野富太郎の人生をモデルとしたオ

リジナルストーリーだった。榎野万太郎(神木隆之介)は、植物の採集に情熱を注ぎ、妻・寿恵子(浜辺美波)とともに波乱万丈な生涯を送る。自分が力を注げるものを愛し、揺るぎなく信念を貫く。そんな力強い姿が、神木や浜辺、彼らを取りまく人々を演じた俳優陣のはつらつとした演技で表現され、登場人物の人生を豊かなものとして感じさせ、ひとつのことに専念する人生の尊さを伝えた。(そのほかの出演＝志尊淳、佐久間由衣、作＝長田育恵、演出＝渡邊良雄、津田温子、深川貴志、制作統括＝松川博敬、主題歌＝あいみょん「愛の花」、ギャラクシー賞9月度テレビ部門月間賞)

### ●注目の単発ドラマ

『TOKYO MER スペシャル～隅田川ミッション～』(TBS、4月16日)は、2021年放送の同ドラマの劇場版公開に先駆けるオリジナルのスペシャルドラマとして制作された。東京都知事の肝いりで誕生した救命救急医療チーム「TOKYO MER(Mobile Emergency Room)」の正式運用開始から半年後の活躍を描く。先進的な取り組み、高い職業倫理、医療技術、チーム医療としての組織力などが緊迫の中に描かれた。続編として展開することで時代と連動したアクチュアリティが感じられた。(出演＝鈴木亮平、賀来賢人、中条あやみ、脚本＝黒岩勉、監督＝松木彩、企画プロデュース＝高橋正尚、東京ドラマアウォード2023単発ドラマ部門最優秀賞)

『生理のおじさんとその娘』(NHK、3月24日)は、生理用品メーカーに勤めるシングルファーザーの光橋幸男(原田泰三)と、その娘の花(上坂樹里)のすれ違いを中心に生理をめぐる思いや気持ちをみつめさせる異色のドラマだった。幸男はSNSで人気者になったことがきっかけで「生理のおじさん」として生理用品の広報活動をしている。娘の父への思いは複雑だ。生理の当事者ではない父は、生理を、娘をどこまで、どのように理解できるのか。生理を入口に立場の異なる者の相互理解についても考えさせる。ラップやアニメをもちいた生理の表現など表現手法にも斬新な挑戦があった。(作＝吉田恵里香、演出＝橋本万葉、その他の出演＝齋藤潤、三山凌輝、制作統括＝清水拓哉、プロデューサー：大越大士、石澤かおる、東京ドラマア

ウォード2023単発ドラマ部門優秀賞、ギャラクシー賞3月度テレビ部門月間賞)

月曜プレミア8『神の手』(テレビ東京、5月15日)は、フリー記者の木部美智子(吉岡里帆)が、文芸賞の授賞式で耳にした受賞作品の盗作疑惑の真相に迫るミステリードラマだ。ひとつの文芸作品を取りまく人々の交錯する想いを丹念にひも解く良作のサスペンスドラマだった。(脚本＝山本むつみ、演出＝塚本連平、出演＝吉岡里帆、大谷亮平、原作＝望月諒子、チーフプロデューサー＝中川順平、プロデューサー＝木下真梨子ほか、東京ドラマアウォード2023単発ドラマ部門優秀賞)

そのほかの注目作として、NHKのドラマがあげられる。70年記念ドラマ『大河ドラマが生まれた日』(NHK、2月4日、出演＝生田斗真、作＝金子茂樹、演出＝一色隆司、制作統括＝佐野元彦ほか、ギャラクシー賞2月度テレビ部門月間賞)、特集ドラマ『幸運な人』(NHK、4月4、11日、作＝吉澤智子、演出＝一木正恵、制作統括＝上松圭、出演＝生田斗真、多部未華子、ギャラクシー賞4月度テレビ部門月間賞)、NHKスペシャル『アナウンサーたちの戦争』(NHK、8月14日、作＝倉光泰子、演出＝一木正恵、制作統括＝新延明、出演＝森田剛、橋本愛、高良健吾、ギャラクシー賞8月度テレビ部門月間賞)。

開局55周年特別企画『弁当屋さんのおもてなし』(北海道テレビ、2月25日～3月18日、全4話)は、悩めるお客を小さなお弁当が救うハートウォーミングなドラマだった。東京から札幌に転勤した小鹿千春(久保田紗友)が、路地裏に佇む弁当屋『くま弁』で、どこかミステリアスな料理人(飯島寛騎)が作る弁当に癒され、彼女も弁当屋を訪れる人たちの思いに心を寄せるようになる。ローカルならではの人間関係、舞台設定に魅力があった。(脚本＝山本透、演出＝平尾由佳子、原作＝喜多みどり、エグゼクティブ・プロデューサー＝橋本秀利、プロデューサー＝星悠平ほか、東京ドラマアウォード2023ローカル・ドラマ賞)

### ●配信ドラマの注目作

配信プラットフォームでのドラマ視聴は、地上波で放送された連続ドラマの見逃し配信への対応が一般化する状況がすすんだ。また、日本

制作の配信オリジナルドラマの注目作には、以下の番組があった。

『舞妓さんちのまかないさん』(Netflix、1月12日配信、主演=森七菜、監督=是枝裕和、津野愛、奥山大史、佐藤快磨ほか、脚本=是枝裕和、砂田麻美ほか)、『君に届け』(Netflix、テレビ東京共同制作、3月30日、主演=南沙良、鈴鹿央士、脚本=宮本勇人、監督=新城毅彦、菊地健雄、原作=椎名軽穂)、『サンクチュアリー 聖域一』(Netflix、5月4日配信、出演=一ノ瀬ワタル、染谷将太、忽那汐里、脚本=金沢樹樹、監督=江口カン)、『御手洗家、炎上する』(Netflix、7月13日配信、出演=永野芽郁、鈴木京香、工藤阿須加、中川大志、脚本=金子ありさ、監督=平川雄一郎、神徳幸治、原作=藤沢もやし)、『離婚しようよ』(Netflix、TBS製作、6月22日配信、脚本=宮藤官九郎、大石静、監督=金子文紀、福田亮介、坂上卓哉、エグゼクティブ・プロデューサー=佐藤奈穂美(Netflix)、プロデューサー=磯山晶ほか)

Netflixの企画では、漫画原作も多く、京都、相撲といった日本らしい題材の作品が注目されたほか、人気脚本家の共同脚本(『離婚しようよ』)といった作品に話題が集まった。また、Prime Videoのオリジナルドラマでは『エンジェルフライト 国際霊柩送還士』(3月17日配信、全6話、主演=米倉涼子、脚本=古沢良太、香坂隆史、監督=堀切園健太郎、原作=佐々涼子)が注目された。

### ●高視聴率見逃し配信再生回数上位のドラマ

2023年1月1日～12月31日に放送された、15分以上の番組を対象とした、「ジャンル別個人視聴率ランキング/ビデオリサーチ視聴率2023年【まとめ】」(関東地区)のテレビドラマの個人視聴率上位番組は、以下の通りだった。

1位=日曜劇場「VIVANT」最終回(12.9%、TBS、9月17日放送)、2位=連続テレビ小説「らんまん」(10.9%、NHK総合、9月8日)、3位=連続テレビ小説「ブギウギ」(9.8%、NHK総合、12月7日)、4位=連続テレビ小説「舞いあがれ!」(9.7%、NHK総合、1月27日)、5位=「どうする家康」(9.6%、NHK総合、1月8日)、6位=日曜劇場「ラストマンー全盲の捜査官ー」(8.8%、TBS、4月23日放送)、7位=連続テレビ小説「ら

んまん」(8.5%、6月1日)、以下、8位、9位は「相棒Season21」の最終回(8.4%、テレビ朝日、3月15日)と、元旦スペシャル(8.1%、同、1月1日)、また同じく9位に24時間テレビ46ドラマSP「虹色のチョーク知的障がい者と歩んだ町工場のキセキ」(8.1%、日本テレビ、8月26日放送)がランクインした。

また見逃し配信再生回数(対象エリア：全国/ビデオリサーチにて算出)では、2位に日曜劇場「VIVANT」(8月13日放送)が、4位に「いちばん好きな花」(フジテレビ、10月12日放送)がランクインしたほかは、5位までが、1位=「あなたがしてくれなくても」(フジテレビ、6月1日放送)、3位=「王様に捧ぐ薬指」(TBS、5月23日)、5位=「真夏のシンデレラ」(フジテレビ、7月10日)とラブストーリーの視聴が多い傾向が見て取れた。

参照元：ビデオリサーチホームページ「2023年に一番見られたテレビ番組は？【完全版】2023年のテレビ視聴率」2024年1月18日プレスリリース、参照URL <https://www.videor.co.jp/press/2024/240118.html> ビデオリサーチの許諾を従て掲載(禁無断転載/引用)

なかまち・あやこ

日本大学芸術学部教授。「国際ドラマフェスティバル in TOKYO」東京ドラマウォード審査委員長など放送関連各賞の審査委員を務める。著書に「ニッポンのテレビドラマ21の名セリフ」(弘文堂)ほか。